

解題と考察



「姑蘇繁華図」と絵引編纂

福田 アジオ

1 姑蘇繁華図

中国には古くから絵画制作の歴史があり、多くの作品が制作され、今に残されている。その絵画の中心になるのが山水画である。自然の情景を描いており、しばしば特定の場所を描いたかのような表題も付けられている。しかし、山水画は写生ではない。画家が一定の理念に基づいて描き出した世界であり、実際にそのような景色が見られる場所は存在しないのが普通である。山水画は自然の山河を描くが、山や川はこうあるべしという理念に基づいて描かれた図であり、現地比定することなどは無意味なことであると言える。たとえ地名は表示されても、その場所を写実的にスケッチした訳ではない。規範化された構成で組み立てられているのである。そのような中国絵画の特色を知るにつれ、「姑蘇繁華図」の特異性、そして資料的価値の高さが浮かび上がってくる。絵引編纂の素材として「姑蘇繁華図」がいかにか適切な図像資料であるかを確信するにいたった。

「姑蘇繁華図」は現在中国遼寧省瀋陽市にある遼寧省博物館の所蔵であり、国家1級文物に指定されている。清の宮廷画家であった徐揚が乾隆24年(1759)に描いた作品である。長さ12メートル41センチ、高さ36.5センチで、それほど幅はない。長さは、明代に描かれた仇英の「清明上河図」が9メートル87センチであるから、それよりも2メートル50センチも長い。日本でいう絵巻物に相当する、画卷と呼ばれる形式の絵画である。紙本着色である。宮廷画家が描き、皇帝が珍藏した貴重な画卷であるが、そのような絵画は一般的に絹本である。「姑蘇繁華図」が紙本であることは不思議であり、その点での検討の余地はあると言える。今回の研究に際し

て、2005年10月に遼寧省博物館を訪れ、収蔵庫深くしまわれている「姑蘇繁華図」を、長時間にわたって熟覧する機会を得たが、その作品の整い、美しいことに驚嘆し、描かれた内容も子細に観察し、その描写の確かさを確認した。

「姑蘇繁華図」はもともと「盛世滋生図」と名付けられていた。絵の末尾の跋文で、自ら「盛世滋生図」と記していることから来ている。新中国になって現在の名称に変えられた。「盛世滋生」は、繁栄する乾隆帝治世下で皇帝の慈しみを受けて豊かな生活を送っている様相という意味であった。これが支配者中心の名称ということで、1950年代に現在の姑蘇(蘇州)の繁栄を描いた図というように変えられたのである。「姑蘇繁華図」は数奇な運命を経て現在遼寧省博物館に所蔵されている。本来絵は乾隆帝に献上されたものであり、北京の紫禁城に収められ、皇帝が鑑賞する絵であった。画卷に押印された御覧の印章は、乾隆帝が12回、嘉慶帝が1回、そして最後の皇帝溥儀が3回である。乾隆帝を別にすれば、溥儀がいかにか「姑蘇繁華図」を好んだかが窺われる。溥儀が溥傑に与えるという形式で、これを紫禁城から持ち出し、天津を経て長春に運ばれ、「満洲国皇帝」の珍藏品となった。1945年8月の日本降伏に伴う「満洲国」崩壊時に、国外に運び出されようとしたが、瀋陽飛行場でソ連軍によって確保され、その後一時民間に流出したが、1948年に東北文物保管委員会が入手し、東北博物館(現遼寧省博物館)に収められた。その後、北京の中国歴史博物館に移されたが、1985年に遼寧省博物館に戻され、現在に至っている(秉琨1986、戴立強2006、遼寧省博物館2006)。

作者の徐揚は蘇州の人であるが、その詳細な伝記

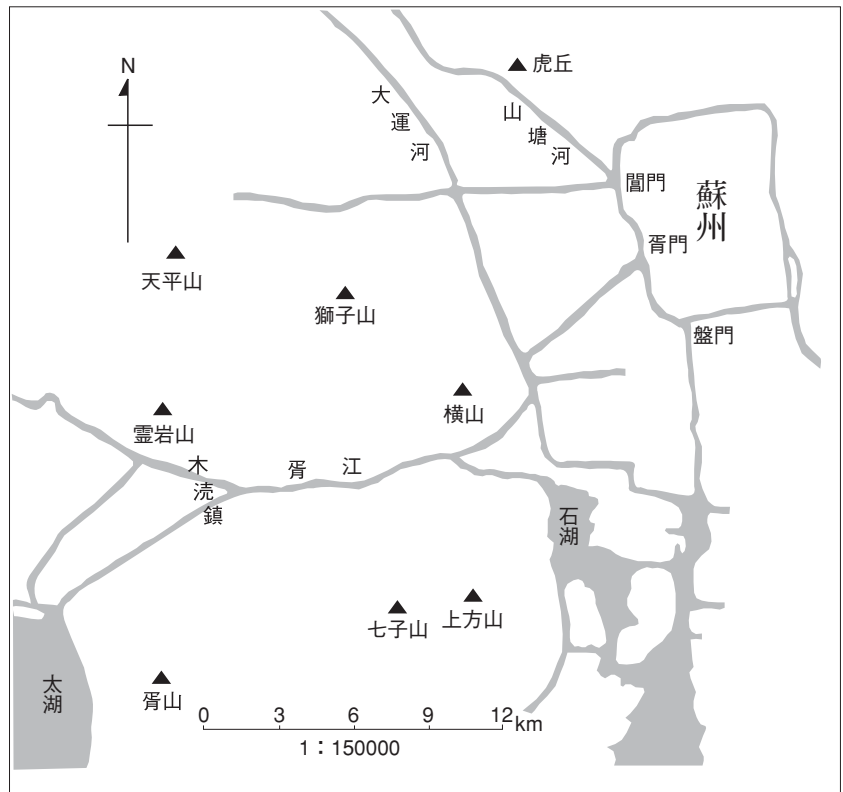
的事実は分からない。生没年も不明である。父祖の代から蘇州に住み、徐揚自身は絵師だったと思われ、また蘇州の地方府の仕事をしていたようである。高宗乾隆帝が江南地方を視察する1751年の「南巡」に際し、絵を献上して認められ、宮中に召し出され、いわゆる画院画家となった。乾隆の2回目、3回目の南巡に随行し、「乾隆南巡盛典図巻」を制作し献上している。宮廷画家になる前には蘇州で活動していたが、その時の作品として「姑蘇城図」がある（中国国内では失われ、日本の天理図書館に残る）。徐揚の作品として知られるのはそれほど多くないが、現在残されている訳ではない。そのなかで「姑蘇繁華図」は最高の傑作と言ってよいであろう（張英霖 1999、遼寧省博物館2006）。

「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の関係は議論されなければならない。従来、「姑蘇繁華図」は「清明上河図」の異本とする考えもあったようである。宋の張拙端が描いた「清明上河図」は、都市とそこでの人々の生活を生き生きと描いた都市図の代表としてとみに有名である。「清明上河図」は明清時代にも少なからず描かれており、「姑蘇繁華図」もその一つと考えようとする意見もある。代表的な「清明上河図」は明の仇英が描いたものがあり、また清代に入って「院本清明上河図」が制作された。周知のように、張拙端の「清明上河図」は北宋の都汴京（現在の開封）を描いたものとされる。市街地の繁栄する様を多くの建物と行き交う人々で示しており、古くから注目されてきた。そして、それに倣って制作された仇英の「清明上河図」（1541）は蘇州を題材に描いたとされる。そして清代に入り、「院本清明上河図」が制作された。これは5人の画家の合作で、やはり蘇州を描いているとされる。

仇英の「清明上河図」を見ても、そこに現在の蘇州および郊外の地形や景観を見つけることは困難である。「院本清明上河図」になると太湖を描くことから始まり、そこから蘇州にいたる運河や道、そして蘇州城と判断できる描き方をしているが、やはり実際の地形に対応しているわけではない。また事物や人物をより古い姿にしようとしている。その点で、「姑蘇繁華図」は大きく異なる。「姑蘇繁華図」を手

にして歩けば、絵の進みに応じて描かれた情景が実際に目の前に展開するのである。特に山容や運河・河川の様相は現実と「姑蘇繁華図」の描写が見事に一致する。実際に写生したと思われる「姑蘇繁華図」と、やはり理念化された構図で描かれた「清明上河図」は別の存在と言うべきであろう。

「姑蘇繁華図」は必ずしも古くから知られた存在ではなかったが、次第に注目されるようになってきた。蘇州の街と郊外を描き、そこに多くの事物を配し、生き生きと人々の生活を描いている。その特色は人々を惹きつけ、特に清代の生活史を知る資料として重視されるようになってきたからである。「姑蘇繁華図」が最初に写真版で印刷刊行されたのは、1986年刊行の遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編『盛世滋生図』（文物出版社）であった。ついで1988年に巖麗妍編『清・徐揚《姑蘇繁華図》』（香港商務印書館）が出され、その存在が広く知られるようになったものと思われる。現在広く見られるのは1999年に刊行された蘇州市檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』（文物出版社）である。また各種の観賞用の案内書も出されている。最も精密な印刷物は、清宮散佚国宝特集編輯委員会編『清宮散佚国宝特集』絵巻（中華書局、2004年）に収録された「姑蘇繁華図」である。また、蘇州で刊行された各種の案内書があり、蘇州を訪れた人は「姑蘇繁華図」の存在を知ることになる。しかし、「清明上河図」ほど有名でなく、たとえば大部な案内書で、版を重ねている郎紹君主編『中国書画鑑賞辞典』（中国青年出版社、1988年）には、徐揚も「姑蘇繁華図」も収録されていない。日本では「姑蘇繁華図」全体を鑑賞し、また活用できるように印刷刊行した書物は未だ見られない。「姑蘇繁華図」に関する研究もほとんどない状態である。わずかであるが、「姑蘇繁華図」を資料にして18世紀蘇州を研究した論文が出されている程度である。「姑蘇繁華図」の本格的検討、また「姑蘇繁華図」を活用しての研究はこれからと言える。



2 「姑蘇繁華図」の描く世界

「姑蘇繁華図」は中国江南地方の中心都市蘇州を描いた画卷である。このことは作者自ら、蘇州西南部の太湖の湖岸近くの靈岩山から始まり、その麓を巡って木澆鎮の街並みを通して、田園地帯に出て、獅子山を見て、東に向かい、蘇州城の西南部にいたる。蘇州城の外壁を見つつ、北上し、西北部にいたり、そこから西北に運河に沿って進み、虎丘に到着して終わると画卷の巻末で記している。その描く景観は驚くほど写実的であり、実際に現地比定が可能なのである。「姑蘇繁華図」がいかにか写実的に景色を描いているかは、実際に現地に立ってみるとどれもが納得することである。その点では、中国の絵画としては非常に特異な存在である。

筆者が最初に描かれた景観と実際の風景が対応していることを実感したのは、蘇州郊外の石湖の風景であった。石湖北端の越城橋から西南方向に眺めたときに見られた風景は、「姑蘇繁華図」に描かれた様相と全く同じと言ってよいものであった。行春橋が架かり、その向こう側に寺院があり、そこから山が連なり、はるか遠くの山頂には塔が見られる。そ

して、石湖には正方形の人工島が見られる。湖心亭といい、現在も湖上に残されている。絵にはこれらがはっきりと描かれている。このことを体験した後、絵の最初の部分に描かれた人々が行楽に行く山は現在の靈岩山、その次の場面である運河には船が行き交い、道路には多くの人があふれる街並みは現在の木澆の街に容易に比定できるほど、実際と絵が対応していることを発見した。また同様に、獅子山の姿も絵に描かれた姿と同じである。蘇州城についても、絵と現状がよく対応している。これらによって「姑蘇繁華図」が実際の風景を写生した絵であることは間違いないと確信した。

風景の描写は、たとえば一定の高さで低空を飛ぶヘリコプターの上から地上を撮影しているという印象を与える。太湖から蘇州城にいたるコースは、原則として川の北側から南を向いてカメラを向け、近景として川、そしてそれに面した集落を描き、その向こう側に田園や山を描いている。従って、川の南側中心に市街地が示され、北側は原則として登場しない。蘇州城に達すると、今度は堀と城壁を外側から、すなわち西側の斜め上からなめるように見て北上する。詳細に描かれるのは城壁に沿った蘇州城

外の様相であり、各所に設けられた城門、橋、橋のたもとに広がる商店街である。城内の様子は遠景として示されているのみである。蘇州城の西北端まで来て、そこから斜めに進み、虎丘を目指すが、この部分は虎丘にいたる山塘河という運河の西南部から運河とそれに沿って運河の向こう側を走る道路を描き、そこに展開する商店街を示している。運河の手前である西南部はほとんど登場しない。

「姑蘇繁華図」は単なる風景画ではない。そこにはその地で暮らす人々が多く描かれている。街並みだけでなく、道を行く人々、商店で買い物する人々、農作業をする人々、ものを生産する人々、あるいは船を操作する人々、船上で宴会をする人々など、実に多くの人物が生き生きと描かれているのである。それらは、描かれた景観がほとんど完全に現在の特定の場所に比定できることから判断して、実際に清代中期の蘇州とその郊外に暮らす人々を描いていると考えてよいであろう。絵画はいかに写実的であっても、もちろんカメラによる撮影ではないので、特定の時間に実際にその場所に描かれた人物がいたという訳ではない。その場所のイメージを作り出すために作者が配置したものである。しかも制作意図が皇帝に見せるためであり、素晴らしい治世に繁栄した様相を描き出そうとしているのであるから、実際には存在していたとしても意図的に排除して描かなかったものも多いに違いない。しかし、描かれた事物や人物はその場所に相応しい存在として配置されるのであり、仮に想像であっても、現実性を帯びていると判断できよう。蘇州とその郊外の景観と、そこに豊富に描かれた人々の所作・行為を把握することによって、清代中期の中国江南地方の生活文化を知る手がかりを得ることが出来ることを確信し、絵引編纂を行った。

「姑蘇繁華図」に描き込まれた事物や人物を数え上げて数量的に把握することがしばしば行われているが、その数字は李華「従徐揚“盛世滋生図”看清代前期蘇州工商業的繁栄」(『文物』1960年第1期)によるものである。「姑蘇繁華図」に登場する人物は全部で12000人余りという。また描かれた各種の船は400艘、商店は260軒余り、橋梁は50カ所、劇

場は10カ所などが見られるという。描かれた人物は4600人と数える説もある(乗現 1986)。

3 「姑蘇繁華図」による絵引編纂

絵引は新しい言葉であり、日本の大きな国語辞典にも見出しとして立項されていない。財団法人日本常民文化研究所が編纂して刊行した『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻によって姿を現したものである。この編纂を主導した渋沢敬三が、言葉を窓口にして情報を示す従来の字引に対して、図像を窓口にして情報を発信するものとして絵引という語を用いたのである。過去に描かれた絵画を資料にして、そこに描かれた事物や人物を窓口に、それらが何という事物や行為なのかをキャプションとして付けて示す。図像から情報を引き出し、示すのが絵引である。それが単なる図解辞典でないのは、辞典編纂のために事物単体を描いて、それに対する単語を示すのではなく、図像として様々な事物が配置されている全体の関連性の中で個別の事物や人物を把握し、キャプションを与えたところに特色がある。そして、さらに相互関連性を読み取り、読み取り解説として加えることが行われた。歴史研究に図像を活用するための情報源として提供したのが『絵巻物による日本常民生活絵引』であった。絵引は高く評価され、日本中世の生活史研究に不可欠な研究工具書となり、研究者の座右におかれ活用されている。

今回編纂を進めた『東アジア生活絵引』中国江南編は、この『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂方式を、日本以外の文化において編纂可能かどうかを実験したものであった。日本では人々の生活の中に絵画が入り込んでおり、しかも写生という方法で記録したり、情報を伝えたりすることが古くから行われてきた。絵引編纂の条件が各時代ですでに準備されていた。それに対して、中国および朝鮮半島においては、図像と人々の関係は日本ほど濃密なものではなかったことが、検討の結果判明してきた。事物や人物を写生して、ありのまま示そうということがそれほど行われなかったし、そのような行為が高く評価されなかった。絵引編纂の前提は、その時

代の生活を写實的に描いた図像の存在である。東アジアの各文化ではそのような図像は限られていることを痛感し、その数少ない写實的図像を対象に絵引を編纂することにした。中国については、18世紀に制作された徐揚「姑蘇繁華図」が絵引編纂にもっとも相応しい図像であると判断し、絵引編纂に取り組んだ。

「姑蘇繁華図」は、18世紀の蘇州とその周辺を實態に合わせて描いた図巻であった。絵には膨大な数の人物が描き込まれていることに示されているように、蘇州とその郊外の生活を写實的に生き生きと描いている。単なる風景画ではない。規範化された形式で描かれた絵画が圧倒的に多い中国において非常に珍しい存在である。そのことが生活絵引編纂の対象にした最大の理由である。

「姑蘇繁華図」は全長12メートルに及び、太湖近くから始まり、近郊都市と農村を描き、次いで蘇州城を描くというように、対象も変化に富んでいる。この内容豊かな「姑蘇繁華図」の総てを対象に絵引を編纂することは不可能であると判断した。人物だけでも4000人を超えるのである。12メートルあまりの図像のなかから生活を描き出している部分を50カ所切り取り、それについて絵引編纂を進めることにした。

この絵引は日本で編纂し、刊行するものである。事物や人の行為を日本語で表記することが前提であった。特定の文化のなかの事物や行為を異なる言語で把握し表記することは非常に困難なことである。日中辞典や中日辞典の項目をみて、当てはめればよいというものではない。個別の事物を中国で何とよいかを確認しつつ、それを誤解のない形で日本語で表記することを行った。これが予想以上に困難な作

業であった。研究の中心はそこにあった。

また、図のなかに描かれた事物や人の行為を関係性のなかで読み取り、解説することを並行して進めた。切り取った図幅のなかに描かれた内容を、演劇の舞台にたとえば、大道具、小道具そして役者も含めて全体として把握し、解説することを試みた。その場合、主役・脇役が展開する物語の筋を重視することはせず、あくまでも舞台設定上の関係性を重んじた。言い換えれば、主役にスポットライトをあてて読み取るのではなく、全体の組み合わせを重視することで解説を行った。

50枚余りの図像は、様々な場面を示している。「姑蘇繁華図」は蘇州城とその郊外を描いた絵画である。実際に現地比定出来るように、どの図も固有名詞としての地名や施設名を伴っている。しかし、絵引は蘇州地方史のための資料整理と情報発信ではない。中国江南地方の18世紀の生活を把握するための絵引編纂であった。従って、固有名詞の究明には重点を置かず、生活事象の把握と読み取りを中心的行った。

果たしてこの『東アジア生活絵引』中国江南編が成功したかどうか分からない。日本で開発された絵引という編纂方式が日本以外の諸地域・諸文化でも可能かどうかを試みたものである。我々が言う試案本である。編纂にあたった者としては、絵引の編纂に一応成功し、絵引という方式が日本以外においても可能であることを示したと思っている。しかし問題点も少なくない。今後、本書を手にした人々の批判から学び、より一層内容があって、東アジア生活文化研究に役立つ絵引に補訂・増補をしていくつもりである。

(ふくた あじお)

【参考文献】

- 金貞我 2006 「都市図における風俗表現の機能」人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班編『図像から読み解く東アジアの生活文化』（神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告3）所収
- 巖麗妍編 1988 『清・徐揚《姑蘇繁華図》』香港商務印書館
- 蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編 1999 『姑蘇繁華図』文物出版社
- 戴立強 2006 「『姑蘇繁華図』と『清明上河図』」人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班編『図像から読み解く東アジアの生活文化』（神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告3）所収
- 張英霖 1999 「歴史画卷《姑蘇繁華図》」蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』文物出版社、所収
- 範金民 2004 「清代蘇州城市文化繁栄の写照—《姑蘇繁華図》」熊月之・熊秉真編『明清以来江南社会与文化論集』上海社会科学院出版社、所収
- 秉琨 1986 「清徐揚《姑蘇繁華図》紹介と欣賞」遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編『盛世滋生図』文物出版社
- 馬宝傑 1999 「徐揚《姑蘇繁華図》賞析」蘇州市城隍檔案館・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』文物出版社、所収
- 遼寧省博物館 2006 『清徐揚姑蘇繁華図賞析』北京東方博古文化芸術発展有限公司
- 遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方志編纂委員会編 1986 『盛世滋生図』文物出版社

「姑蘇繁華図」と18世紀蘇州

鈴木 陽一

1 中国伝統文化と「姑蘇繁華図」

中国の伝統文化の中では、図像という記号と現実との対応関係が近代リアリズムと大きく異なっていることについては多くの議論があり、筆者自身も述べたことがあるので⁽¹⁾ここでは詳論を避ける。ただし、議論の前提として、近代リアリズムを含めたあらゆる図像は現実そのものではなく、コードの体系を有する記号として現実との関係を持っているのであり、コードの解釈が可能であれば、記号の意味作用を読み解くことも可能であることを確認して先へ進む。

「姑蘇繁華図」は中国の図像の中でも、それが皇帝に帰属する長篇の画卷であるという点において特色がある。それは第一に北宋の都汴京＝開封を描写した宋・張択端の「清明上河図」と、蘇州を描写したものとされる明・仇英の「清明上河図」を範としたものであることを意味する。⁽²⁾同時に清代に描かれたいくつもの重要な画卷、特に康熙、乾隆の時期に描かれた南巡図と呼ばれる画卷と、その内容において重なり合うものであること、さらに乾隆の「南巡図」とは筆を執った画家達は同じようなメンバーであったことも、「姑蘇繁華図」を解釈する上で重要なポイントと言えよう。そこからまず読み取るべきは、この画卷の目的は、画家達が仕えた乾隆皇帝の治世と太平を慶賀することであり、その結果として、画卷の中に悪天候や自然災害、病や死、反乱や騒動は描かれることはなかった。皇帝のもと、宮廷に仕える画家達がこうした目的から逸脱して、忌むべき現実を敢えて描くということはありませんでした。

その一方で、「姑蘇繁華図」は、特に明・仇英の

「清明上河図」に比べ、明らかに現実の蘇州とその周辺を丹念に観察したうえで描かれていることに特色がある。仇英の「清明上河図」にも蘇州の風景が反映されていることは当然だが、それよりもなお宋・張択端の作品を範とする意識の方がはるかに強い。これに対して「姑蘇繁華図」は、部分的ながら相当数の建築物の同定が可能であるほど、歴史的事実としての蘇州あるいはその周辺の風景と密接に結びつけられている。こうした傾向は康熙から乾隆にかけて描かれた「南巡図」などの何篇かの長篇の画卷に見られる現象であり、同じ宮廷の画家達による作品であっても、明・仇英の「清明上河図」を粉本とする数々の「清明上河図」とは、蘇州の現実を描くという点では明らかに異なっている。

「姑蘇繁華図」に描かれる人物には少なからぬ官僚（高官と吏）も含まれ、科挙の試験場である貢院を含む様々な官庁も描かれている。しかし、全体として、描かれる対象は圧倒的に市井の人々であり、民間の建物である。しかもほとんど全ての人物は動いている。彼らは働き、乗り物で移動し、歩き、走り、見、聞き、読み、書き、遊び、飲み食いする。そして何よりも特徴的なのは至る所で語り合っていることである。

さらに画家の筆は人と建物だけでなく、家屋の中の家具、さらには卓上の文房具や食器にまで及ぶ。見えるはずのない家の内部は、敢えて壁を切り取るというフィクショナルな枠組みを設定することによって我々の目にさらされる。そこまで我々の眼前に再現された建物やモノは、ところどころ観察の不足、欠如、伝統的観念への隷属による現実との乖離は見られるものの、その細部へのこだわりは、西洋近代のリアリズムと同質のものでないにせよ、言葉の本

来の意味としての〈real＝モノ〉〈ism＝主義〉が長大な画面を通して存在しているからこそ実現したと思われる。ではそのリアリズム（モノ主義）はどこから生まれ、「姑蘇繁華図」として結実したのか、そのことを考えながら「姑蘇繁華図」の解説をどのように進めていこうとしているのかを概括するのがこの小論の目的である。

2 18世紀の蘇州

清朝は康熙、雍正という2代続いた働き者の皇帝の後を受けた乾隆帝の時代にそのピークに達した。領土は拡張し、ジャガイモなどの新たな作物の普及と相まって、人口は18世紀の百年で2億から3億へ増加したといわれる。とりわけこの時期、江南には豊かな農業生産を基礎として、明代に海外からもたらされた豊富な金銀により、貨幣経済と様々な手工業が発展した。都会には労働する人、管理する人、そして消費する人が溢れ、農村は様々な換金作物と労働者を都市に提供した。やがて江南の都市と農村には全国から物資と貨幣が流れ込んだ。特に都市労働者の衣食住さらには娯楽に供するために、物資と文化と人間がさらに集まった。

こうした現象はこの時期、南京以東の江南の諸都市であればどこでも見られたはずだが、蘇州のそれは少し他と異なっていた。

蘇州の第一の特色は、この地が養蚕業を背景に、皇帝および皇族、高級官僚のために手刺繍を施した上着など、絹織物の衣服を提供する江南紡績業の中心地であったことだ。また蘇州周辺では、湿潤な気候を利用した藍染めも盛んで、「土布」と呼ばれる藍染めの綿布も盛んであった。このため、紡績業に関連する優れた素材、技術、人材、そして資金がこの地に集中した。それが可能であったのは、蘇州の後背地の養蚕、農業、そして都市部の高い教育水準に加え、この地が大運河によって北は長江、黄河、北京に、南は杭州と海につながり、太湖を通じて安徽省、江西省、浙江南西部さらには遠く福建省にまでネットワークを広げていたからであった。「姑蘇繁華図」に描かれた大小無数の船舶と、船中に積載

されている様々な種類の荷物、それを扱う数多くの問屋、そして船と港で働く膨大な数の人々は、無数の物資が各地から蘇州に運び入れられ、あるいは蘇州から各地に運び出されようとしていることを表し、蘇州がいかにネットワークのターミナルとして機能していたかを如実に示している。⁽³⁾

蘇州がネットワークのターミナルとして機能していたことは、歴史資料のみならず、当時の文学作品からも容易に見て取ることが出来る。

明末から清初にかけて江南地域で出版された、「三言」「二拍」と称される5部の短篇小説集所収のおよそ200篇の作品⁽⁴⁾を見てみると、うち蘇州を舞台にしたもの、あるいは蘇州人が主人公であるものは19篇、すなわち10%ある。これは杭州を舞台にしたものにははるかに及ばないが、江南の諸都市の中では揚州、徽州などよりも多い。なかでも特に興味深いのは蘇州人の多くが商人として設定されていることである。彼らは時に単独で、時に集団で中国国内は言うに及ばず、「転運漢遇巧洞庭紅 波斯胡指破龍殼」（『初刻拍案驚奇』第一卷所収）という作品に見られるように、船をチャーターして海外まで商売に出かけることもあった。

小説ではそうした商人達が旅先で事件に巻き込まれ、物語が展開するという設定になっていることが多い。旅先で事件に巻き込まれるという設定自体は、古くはヨーロッパの「悪漢小説」にも見られ、前近代の物語文学では最も普遍的なパターンであるが、蘇州人を商人として主人公に設定するには、蘇州＝商業都市というイメージが不可欠であった。従って、「姑蘇繁華図」よりも百年以上も前、資本主義の萌芽期といわれる明末には蘇州と商業とを結びつけるイメージが既に確立していたと考えられるのである。こうしたことと、「姑蘇繁華図」では農耕や漁業を営む場面が大きく明確に描かれることはほとんどなく、遠景におかれていることが多いことと関係があると考えてよいのではないか。

さらに注目されるのは、すでに述べたように「姑蘇繁華図」の中の人物はそのほとんどが何かを話し合っていることである。その話とは飲食しながらの話、歩きながらの会話、挨拶と立ち話も含まれるが、

圧倒的に多いのは、仕事をしながらの話し合いである。特に同一船上での会話、船中の人々と他の船中の人々、あるいは陸上の人々との会話が多い。何も語らず船を操ったり、荷物を運んでいるだけの人物を見出す方がむしろ難しい。ここから、我々は「姑蘇繁華図」の中の人物が身分や階級・階層で描かれることもある——帽子や衣服で区別される——が、多くは他との関係、しかも職業上の関係で描かれていることが多いことを容易に見て取ることが出来る。そこには手工業、商業、輸送業、飲食業など、消費者も含めた都市における様々な産業の関係者が描かれる。

さらには、芝居や芸能の演じ手と観客、役人の行列と観客などという、都市における文化の供給と消費という関係の中で描かれるケースも少なくない。あるいは繁華な場所の所々に、喧噪をぼんやりと眺めている、都市における時間の消費者も描かれている。商業都市蘇州においては、まさに人間はそれぞれの有する他との関係において捉えられているのであって、身分で描かれているのではないのだ。ここに「姑蘇繁華図」の最大の魅力があると私は考えている。

3 「姑蘇繁華図」の迷路

これに関連して、先に触れた「姑蘇繁華図」の〈realism＝モノ主義〉、すなわちモノへのこだわりも、実は人間を関係で捉えることと結び付いているのではと考えることができる。宴会における主客の区別、商店、船上、路上で働き、動き、語り合う人物達の地位と役割、こうしたものは、彼らの服装のみならず、彼らの手にする様々なモノ、彼らの周囲に無造作に配置されたモノによって差異化され、提示されていると思われるのである。

言葉を換えて言うならば、店舗名や商品名など文字という記号によって提示される情報は極めて限定的なものであり、大多数の人間の関係は、画卷に溢れるモノの差違を記号として活用し、人々の関係を示そうとしているのではないだろうか。とすれば、「姑蘇繁華図」に描かれたモノ自体をパラダイム（範

列）の中においたうえで、モノとモノとの関係をシタックスとして読み解くことで、図像の意味をも読み解くことができるはずなのである。

だが、残念ながら、当時の人々にとって常識でしかなかったモノの差違という記号は、二百五十年後の今日、その大半は難解な暗号となってしまった。我々は無数の、細緻に描かれたモノの洪水を前にして、差異化された記号を読み解く乱数表を未だ見出せずにいる。「姑蘇繁華図」の解読を拒否するモノの洪水によって、我々は迷路に迷い込んでいる。

我々を迷路に引き込んでいるのはモノの洪水だけではない。所々に見える歪んだデッサンや、モノの描き忘れ、着色し忘れ、描き間違いの消し忘れなどと思える部分は、画家達は本当に現実を見て描いたのかという疑問を生じさせ、迷路を一層複雑なものにする。

さらに我々を悩ませるもう一つの大きな原因は、この画卷の基本的な構成の根本的な矛盾にある。この画卷は右側が巻頭で、左側に開いていくという様式である。一方、画卷を現実の風景に対応させると、この画卷は蘇州の西南にある聖地靈岩山とその麓の集落から出発して東へ向かい、木洩鎮を経て蘇州の西南の門に到達し、そこから城壁の外側を北上し、東北の門から西行し、虎丘に到達して終わる。画卷に描かれた場所をたどれば、出発点から東→北→西と2度方向を変更する必要がある。

このような移動の方向と、画卷が右側を巻頭とするルールを同時に実現しようとするれば、靈岩山から城門までは北側から南を見るという設定とし、南側を上部に、北側を下部に描くより方法はないはずである。しかしながらこの画卷ではおそらく「天子南面」という原則に従い、その天子に見せるものということで、全て北側を上にして描いている。このため、巻頭から蘇州の城門につくまでは左右と天地が完全に捻れてしまっている。

この捻れを画卷では、南側から北を見た風景を一定の幅で切り取り、本来ならば左から右へ並べるべき個々の図を、右から左へ並べ替えることによって修正しているが、その不自然さは覆いがたい。しかも、当然のことながら多くの風景、建築物が省略さ

れ、また風景と風景との距離も極端に近づけるなどの処理が施されているため、どこの風景を描いたのかその同定が難しい場合や、獅子山のように一体どの方向から描いたのかが分からないということが起こる。こうした捻れ、省略され、距離を恣意的に縮められた風景の図像と、個々の場面における繊細なモノの描写とを同時に成立させる文化的コンテキストのコードは一体どこにあるのか。ここにも迷路がある。

4 「姑蘇繁華図」の描かなかったもの

迷路巡りはひとまずおいて、もう一度蘇州と小説の関係に戻る。蘇州は明末清初の小説の舞台に利用されたが、杭州ほど頻繁ではなかった。特に、蘇州人は多く出てくるが、杭州の場合と異なり、蘇州の個別の地名、個別の名勝旧跡はほとんど用いられることはなかった。それは、単純に言えば蘇州の地名が杭州ほど、文字媒体を通じて知られていなかったからである。ではなぜ、杭州の地名は知られ、蘇州の地名は知られることが少なかったのか。それは蘇州と杭州の有する美的空間の性質の違いに由来する。

もともと、蘇州城内の美的空間の大半は、個人の庭園という閉ざされた空間に属し、虎丘、山塘街、寒山寺という遍く知られた名勝は城外の、例外的な、しかも面積的に限定された空間でしかない。杭州の西湖のように都市に隣接した、個人、あるいは詩社のメンバーが詩作を行うことの出来る、規模の大きな開かれた観光空間を蘇州は持っていなかったのである。西湖という観光資源に恵まれた杭州は、いち早く観光都市化して多数のガイドブックが生まれ、そのガイドブックの普及を基礎として、杭州を舞台とした小説が次々と書かれた。しかも、それらの小説でさえも、『西湖佳話』のように一部は明らかに観光案内を目的としたものであった。これに対し、庭園と紡績業と商業の都市蘇州は、城内あるいは隣接した地域に大規模な観光名所を持たないために、杭州のような観光都市として振る舞うことは不可能

であった。

このことを踏まえて、「姑蘇繁華図」を見てみると、蘇州城内がほとんど描かれていない、とりわけ蘇州の美を代表する庭園が全く描かれていないことに気がつく。「姑蘇繁華図」にも個人の邸宅という閉鎖的な空間が描かれていないわけではないが、そのほとんどは宴会や結婚式という儀式的場面を設定することで、外部に向かって開放された空間として描かれている。こうした一時的に空間を開放する設定には、建物の内外で職業的つながりを有する人物が会話をするというものが頻繁に見られる。あるいは最も素朴な設定として、家の中の住人が道路とそこに展開されるイベントを見ることで、結果として窓や家を通して家の中が開かれた空間に変更させられているのである。

つまり、「姑蘇繁華図」に描かれた建築物あるいは場所は、もともとパブリックなものであるか、何らかの理由で一時的に開かれた空間になっているところが選択されているのだ。これに対し、蘇州城内の高官の私邸である庭園はあくまでも閉ざされた空間として、観光とも産業とも商業とも無関係の場所と化し、ひいては太平の御世とも無関係の空間として削除されてしまったのである。清朝に人気となり、観光ガイドブックが出版された虎丘と山塘街が一部の省略に留まり、橋や建築物までも細かく、かつ正確に再現されているのは例外に属する。

これらのことから、「姑蘇繁華図」の作者達にとっては、蘇州は美しい個人庭園の集中した都市ではなく、何より水上交通のネットワークのターミナルであり、産業と商業の中心地として太平の御世を謳歌している商業都市であったと私は考えている。

5 まとめとして

18世紀の中国には確かに近代への胎動があったと私は考えている。先に述べた経済的基盤に見える変化の他、清朝考証学のテクストクリティークに見える実証的で合理的な考え方、西洋から伝わった天文学や絵画の遠近法の影響、作者個人の実人生を反映した『紅樓夢』と『儒林外史』という小説の出

⁽⁶⁾ 現などはいずれも近代への動きと考えるとよいと思う。「姑蘇繁華図」におけるモノと関係で人を描くという手法もまた、近代への一步を示したものと言えるのではないか。

無論、近代化への動きは動きであって、それ以上のものではない。先に述べたような風景を描くときの捻れだけでなく、「姑蘇繁華図」には実際のものを見ないで描いている、いわば画家が頭の中の観念で描いている部分もある。また、伝統に束縛され、現

実を見ようとしても見る事が出来ないまま描いてしまったために、奇妙な描き方をしていると思いき箇所も何カ所も存在する。

どうやら、我々は「姑蘇繁華図」の解読に当たっては伝統的文化の暗号表と、近代へ向かう新たな文化の暗号表とを必要とするらしい。この小論が、そうした新旧二つの暗号表の完成のためにわずかなりとも寄与できるよう、多くの方の御叱正、御教示を賜りたい。

【注】

- (1) 拙稿「中国の図像についてのノート」(『年報』第1号 2004年3月) 及び拙稿「『姑蘇繁華図』と18世紀中国におけるリアリズムの曙光」(『図像から読み解く東アジアの生活文化』2006年6月)を参照。
- (2) 古原宏伸『中国画卷の研究』(中央公論社、2005)を参照。なお、仇英も徐揚も宋代の「清明上河図」そのものは目撃していない。
- (3) 蘇州を中心とする江南の経済発展については以下の書籍を参照した。
松丸道雄等編『中国史4 明・清』(山川出版社、1999.6)
川勝守『明清江南市鎮社会史研究』(汲古書院、1999.8)
上田信『中国の歴史09 海と帝国』(講談社、2005.8)
「三言」、「二拍」と略称する
- (4) 17世紀天啓年間、蘇州の馮夢龍によって三部の短篇小説集が出版された。『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』である。『古今小説』は再版の時、『喻世名言』と改題されたため、「言」の一字をとり「三言」と呼ばれた。その後、崇禎年間には南京に住む凌濛初によって『拍案驚奇』『二刻拍案驚奇』が出版され、「拍」の字をとり「二拍」と呼ばれた。作品数は二百篇には数篇足りない。
- (5) 杭州を舞台にしたものは50篇をはるかに超える。これは杭州が南宋という亡命政権の首都として、歴史的悲劇のシンボルとしての都市であり、分断国家の中で別離と出会いの起きやすい都市であったことが大きく影響している。と同時に、本文中でも触れたように、杭州が中国史上最大の観光都市として、都市と風景の情報が共有されていたことによるところが大きい。
- (6) 自伝的小説は、自らの歴史を素材とすることで、フィクションでありながら物語世界をリアルに再現することができた。この枠組みは「姑蘇繁華図」と類似する。

【補注】

この小文を書き上げた後、台湾故宮博物院所蔵の清・院本「清明上河図」(天津人民出版社 2007)と比較を試みた。事物、人物等に多くの共通した図像が見えるが、「清明上河図」は宋代のものとして描かれ、服装や髪型は全く異なる。同時に「清明上河図」では、「姑蘇繁華図」に存在しない物乞いやケンカの描写が描かれていて、極めて対照的である。ここからも「姑蘇繁華図」の太平の御世を賛美するという意図がはっきりと読み取れる。

明清小説と「姑蘇繁華図」

佐々木 睦

はじめに

2003年より参加させていただいた『東アジア生活絵引』中国江南編作成の事業を終えるにあたり、この一文をしたためることにした。普段中国の古典小説を扱う身として「姑蘇繁華図」は非常に興味深い対象であり、特に明清小説を読む際に多くの視覚的イメージを与えてくれた。明から清への交替期に、幸いなことに江南一帯は壊滅的な破壊をまぬがれたことや首都から遠く離れていたこともあり、建築はもとより、文化的な面でも多く明代のものが残された。したがって「姑蘇繁華図」は乾隆24年（1759）の作とはいえ、清代の小説ばかりでなく、明代の小説を読む際にも大いに示唆を与えてくれるのである。

とはいえ、この一文は何かを明らかにしようという明確な意図は持っていない。解説作業の時々を得たインスピレーションのようなものを思いのままに書きつづろうと思っているだけである。そして「姑蘇繁華図」が懐抱する物語について思いをこらし、また「姑蘇繁華図」から聞こえてくる音に耳をすませてみたいのだ。

1 閶門の恋

「姑蘇繁華図」も終わりにさしかかるあたり、ひととき目を惹くのが閶門にかかると虹橋（清代には釣橋、吊橋とも言った）の盛況ぶりである。

閶門は蘇州城の六つの門の一つであり、ここを経由して運河は北上を続け首都北京へ向かう。商業都市として栄えた蘇州にあって重要な拠点でもあった。このにぎわいぶりは広く知られていた。

ここで閶門のイメージについて語るために強引に話を変えよう。

中国では明から清にかけて世界に誇る長編小説が陸続と生み出されたが、そのうちの一つに『紅樓夢』がある。『紅樓夢』は一名を『石頭記』という通り、物語の中心となる人間界の出来事は石頭——大きな岩に刻まれている。その物語の始まりはこうである。

……そのおり、大地は東南が沈下しましたが、この東南のかたすみで姑蘇（江蘇省の蘇州）というところがあって、城内の閶門と呼ばれる一郭は浮き世でも指折りの富貴風流をもって鳴る土地柄。（伊藤漱平訳による）⁽¹⁾

この冒頭、文学と視線というテーマからもなかなか面白い。この冒頭は二人の仙人と中国神話において天が壊れた際の補修に使われず捨てられた岩との会話から始まる。「大地は東南が沈下した」というのも神話に基づいており、したがって読者の視線はいまだ仙界をふらふらとただよっている。蘇州という地名の出現により、物語の空間は神話的な時空から、現実的な時空へと移り、読者の視線も仙界から雲を突き抜け、人間界に憧れた岩とともに一気に人間界へ落下してゆく。そして一直線に蘇州へ留まるとそこは世に知られた閶門。門前に行き交う人々、運河に浮かぶ船また船。商店街の喧噪も聞こえて来るようである。

ここから始まる長大な恋愛悲喜劇、人間ドラマの冒頭を蘇州から始めたことは、いかにも象徴的である。『紅樓夢』の舞台となる大観園は蘇州の拙政園をモデルにしたというのはもはや定説であり、作者曹雪芹の幼少時の蘇州体験の反映も類推させるが、問題はそこではない。蘇州は古来より「魚米之郷」と称された豊穡な地であり、水上交通の要所という

地勢上の利もあって、清代には商人の活躍する中国第二の大都市へと膨れあがっていた。しかしながら物産の流通を見ても、官位栄達のたどる道を見ても、終着駅であった首都とは違い、あくまでも通過点に過ぎない、これが蘇州のポジションであった。加えて首都から距離を隔てられていることからの気楽さ、奔放さによる熟爛した文化を持つ独特の都市でもあった。さて「都市」の繁華さ是不特定多数の人間が行き交うことによって形作られる。そしてそこでの出会いから物語が生まれる。不特定多数の人間たちの行き交いから生まれるのは恋愛ばかりではない。憎しみや裏切りなど人間の闇の部分も発揮される。それが「都市」のもつ重層の一つなのであり、ここでは天界と対立するところの人間世界を象徴する街として選ばれたのが蘇州であった。

さて、引用は蘇州という地名に続いて閶門に触れる。そう、蘇州と言えばまず閶門なのである。これには閶門に対する、作者のイメージも与ってしようが、同時にこの作品を読む同時代の読者たちにも同じイメージを喚起させることが可能なのが閶門であった。「浮き世でも指折りの富貴風流」が凝り固まった場所として。

明代の文人唐寅（唐伯虎）を主人公とする恋愛小説「唐解元玩世出奇」（明『今古奇観』巻33）では唐寅が侍女の秋香を見初める場所がまさに閶門である。⁽²⁾

さて、蘇州には葑・盤・胥・閶・婁・斉の六門があるが、中でももっとも賑わうのが閶門で、舟や車でごったがえしている。まことに

青楼に上り下りする美姫三千
東西に流れうずまく黄金百万
夜明けまで客足続く商家の門
四方から集まり来る国なまり

（駒田信二・立間祥介訳による）⁽³⁾

蘇州年画にも閶門とそのにぎわいを描いたものが多い。おみやげとして好まれ、わが国にも将来されているが、詩文・小説ばかりでなくこういう視覚をともなったアイコンによって、繁栄する蘇州の象徴たるところの閶門のイメージは不断に増殖を重ねていったに違いない。

さて、閶門が蘇州という都市の繁栄という明るい部分を象徴していたということはひとまず確認できたと思う。次にもう一つ別のイメージを持つ蘇州の門を見てみよう。

2 万年橋と描かれない復讐の門

「姑蘇繁華図」で閶門とともににぎわいを見せているのが、胥門の外にかかる万年橋である。実は胥門は万年橋とは元々やや位置がずれている。おまけに「姑蘇繁華図」では空間が自由にゆがめられている。にしても絵ではこの門がよく見えないのが気にかかるが、ひとまず

閶門・虹橋——胥門・万年橋

という対応関係は認めてもいいだろう。

さて閶門前の虹橋とこの万年橋の風景を見比べてみよう。虹橋上には店舗が並び、万年橋上には露店が並ぶという対称性も面白いがひとまず留保して、僕としては万年橋には妙に橋の下を見ている人たちが多くこそ問題にしたい。虹橋の方はわずか二名が橋上から眺めているに過ぎないが、万年橋の方はざっと見て二十数人はいる。もちろん虹橋の両端を店舗が塞いでいるという構造上の問題もあろうが、それにしても万年橋の方は背後の商店街の二階からも眺め下ろす視線を確認できるのではないか。彼らは見ることを楽しんでいるのである。

おそらくここは蘇州の風景のうち明代と比べて最も大きく変貌した場所ではなかろうか。古い蘇州の地図を見てもともと胥門のところから運河を渡る橋はなかったり、あっても粗末なものだったりしたようだ。同治年間の『蘇州府志』巻33が引く万年橋建造に関する徐士林の記によると明代には巨板橋——字面では巨大な板の橋——がかかっていたが、それも壊れて久しく、蘇州城の門のうち胥門にだけ橋がないとある。かくて乾隆5年（1740）に絵のような見事な橋がかけられたのだ。それを記念して「姑蘇繁華図」に描かれたような石碑が立てられ、この橋を顕彰する牌楼が橋の前後を飾ることとなった。この新しい橋が、閶門とともに蘇州の名所となったことは、先ほども触れた蘇州年画に胥門と万年

橋をテーマとした「新造万年橋」と題する絵が多いことから確認できる。それら万年橋を描いた年画では橋の開通を祝ってのドラゴンボートレースやサーカスの様子がちりばめられ、祝祭的ムードに満ちている。つまりまだ新しい橋なればこそ、店舗はいまだ作られず、露店が自由に並び、多くの人々がこの橋から行き交う船や作業の様子を見ることを楽しんでいるというわけである。蘇州に出現した新しいイメージの出現に浮かれているようでもある。本画卷中には多くの「見る人々」が登場する。しかし芝居を見る人々、技芸を見る人々とは違って、彼らは蘇州のイメージを見ていることになり、そこにはメタ的な視線が感じられる。

ところでこれら蘇州年画は「姑蘇繁華図」とは真逆に、胥門の方から見る構図となっている。そして「姑蘇繁華図」と比較して気になる点が二つある。一つは胥門と万年橋との位置関係。前述のように胥門と万年橋はそもそも若干位置が離れているのだが、「姑蘇繁華図」ではあまりに距離が離れ、かつ胥門はあたかも顔を背けるかのようにねじれて入り口を隠している。もう一つは、入り口を背けたことによって年画では見られる「胥門」の名を記した門額が「姑蘇繁華図」では見あたらないことだ。あたかも胥門はその存在を隠されているかのようなのだ。このことには何か胥門の持つイメージというものが関わっていないだろうか。

僕が万年橋の新しいイメージを強調するのにはやや理由がある。あまり適切な例ではないかも知れないが、たとえば東京という都市を取ってみよう。新宿、秋葉原、白金、大久保といくつかの地名を挙げただけでもそれぞれに付随した異なったイメージが喚起される。浅草、銀座のように長く同じイメージの染みついた街もあれば、秋葉原のようにそのイメージが短期間に急激に変化した街もあろう。それではいままで話題にした二つの門と橋はいかがであったろうか。蘇州の六つの城門のうち閶門は富貴と繁華によって広く知られ、また蘇州人にとっては外部との接点、外から来る者にとっては蘇州の入り口として特別な意味、イメージを持っていたであろう。ならば万年橋のある胥門はいかなるイメージを持っ

ていたであろうか。

ここで取り上げたいのが、明代の小説「張廷秀逃生救父」(明・『醒世恒言』巻20)である。邦訳もなくあまり知られていない話なのでざっとあらすじを述べよう。

江西の家具職人張権は家族を連れて蘇州に移り住む。二人の息子廷秀(この物語の主人公)と文秀は聡明であり、家具造りも学ぶ。兄の廷秀は玉器屋王家の主人に気に入られ、次女と結納を上げる。父も呉服屋に仕事替えをして大繁盛。しかし王家の財産の独り占めを狙う長女夫婦の悪巧みによって父は強盗に仕立て上げられ監獄へ入れられる。さらに長女夫婦が仕組んだ讒言により、廷秀は王家を追われてしまう。廷秀は父の容疑を晴らすため、巡按御史に訴えんと、弟とともに鎮江へと向かう。さて、兄弟の乗った船も実は長女夫妻の用意したもので、張兄弟は途中で河に投げ捨てられる。弟の文秀も河南の呉服屋の楮衛の船に拾われて養子となり、名を改める。一方兄の廷秀は川をさかのぼり、役者の一座に拾われて修行を積み、一流の役者となる。後に南京で芝居中、礼部主事の御承恩に見いだされ養子となり名前を改めて学問に励む。北京に科挙の最終段階の試験(殿試)に赴いて、弟と再会を果たす。兄弟はともに合格し、高官に任じられる。兄弟は長江を下り、庶民に変装して蘇州に戻り、見事復讐を果たす。

あらすじではいささか省略したが、成功と転落が交互にめまぐるしく訪れる物語である。⁽⁴⁾川に流された後に廷秀がつく俳優業は明代では賤業とされ、社会の最も底辺に位置していた。物語の最後につく高官とは社会的ステータスでいえばまさに対極に位置していると言える。また張廷秀が川をさかのぼるという部分は神話的であるし長江流域に見られる貴種流離譚のパターンも踏襲しているようだ。その最も有名なのが三蔵法師玄奘の生い立ちを語る「江流和尚故事」であるが、ここでは名前を挙げるだけにしよう。さて、川に落ちた廷秀は実は一度死に、よみがえっている。つまりこの物語は死と再生の物語としても注目される。

3 船旅とドラマ

さて「姑蘇繁華図」を眺めていると明清小説の典型を想起させるような場面、あるいは人物がいくつか目に留まる。スケッチとして以下に二例ほど書き記したい。

まずはいま眺めてきた万年橋の下の運河に目を見やると、大小様々な船が浮かび、船上ではあくせくと働く人々やその営みを見ることができる。さて橋の向かって右側に一人半身をさらし、外をのぞき見している女性がいる。この女性を見た瞬間に僕の脳裏には小説の二つの典型が浮かんだ。一般に「姑蘇繁華図」には女性があまり描かれていない。中国では旧時女性はむやみに人前に姿をさらさないのが普通だったからそれも当然なことではあろう。⁽⁵⁾それでも抑えきれない浮華への憧れ。かくて女性たちは外をのぞき見る。本画卷にも窓から外をうかがう女性が数名描かれている。あるいは輿から、あるいは船窓から外をのぞき見る女性と、たまさかそれを目撃した男性との恋の物語が、中国小説の濫觴とも言うべき唐代伝奇以来、いったいどれほど書かれてきたであろうか。半身の女性はこのお決まりのパターンを予感させる。⁽⁶⁾

もう一つの典型。河上・船旅で起きる事件。事件とは上記のような恋愛ばかりではない。強盗・殺人は日常茶飯事で、「顧阿秀喜捨檀那物 崔俊臣巧会芙蓉屏」(明・『初刻拍案驚奇』巻27)に見られるような夫婦の別れはその後の再会に、「蔡瑞虹忍辱報仇」(明・『醒世恒言』巻36)に見える一家惨殺は、復讐へとつながり、壮大な物語の起点となっている。

吉田真弓氏は白話小説において河や船がどのような役割を担ったかを論じた一文で、白話小説には船の登場シーンが多いと述べ、船が「移動する密室と化す」ことを指摘した上で、以下のようにとまとめる。

だが海原の航海とはちがひ、河旅は陸との接点に近い。だからこそ、河船は一時的な非日常の空間として、物語の展開に転機の間を提供したのである。⁽⁷⁾

詳しくは氏の一文につかれないが、結びにも優れた指摘があるので引用しよう。

本作では明清の白話(口語)で書かれた通俗小説にありがちなように、前半と後半がすべて対称的となっている。その対称性は細部にまでわたるがここでは一切省略して大枠だけとらえると、前半では転落して蘇州から出ていき、後半では出世して蘇州へと戻ってくる、ということになる。さて、出ていく時の門が閶門で、帰ってきた時の門が胥門であることは見逃すことができない。ここで強調したいのは本作品では閶門と胥門がひと組の対立項目として立て得るのだということであり、ひいてはそれは当時のこの二つの門に対するイメージを反映していたのではないだろうかということである。

閶門が他の都市に通じる表玄関だったことと対照させるならば胥門は勝手口のような存在にあったとも言えよう。兄弟が人目につかないように選んだ手段が、平民に身をやつすことと同時に、この胥門を選ぶことだったことは、この説の蓋然性を増す。

そしてもう一つ見逃せないのが胥門の名が春秋時代の呉の宰相伍子胥に由来するということだ。伍子胥は楚から逃れて呉に仕え、故国に復讐を果たした人物で、後に呉王夫差に自害を求められると、隣国の越が呉を滅ぼすのが見えるように自分の目をくりぬいて城門にかけよという壮烈な言葉を残したことでも知られる。目をかけた城門は東の門とされ、胥門ではないが、胥門は呉の宰相伍子胥の名をいただいた復讐と怨念の門として、ネガティブなイメージが付与されていたのではなからうか。胥門が伍子胥の名とともに復讐のイメージを持つのであれば、復讐を誓って帰還した兄弟が胥門を選んだことは必然とも言えよう。万年橋の開通とその祝祭的気分の中で、そのネガティブなイメージがどれほど払拭され、閶門とのイメージの落差を縮小されることになったかを知るよしはない。ただ蘇州年画には確かにその時の興奮ぶり、祝祭的気分が残されており、「姑蘇繁華図」でも観光する人々や石碑、牌楼によってその余韻を感じることはできる。しかし皇帝に献上するものとして、復讐と怨念の門である胥門は、意図的に位置をずらされ、向きを変えられ、さらにその名を隠されたというのは僕の考えすぎであろうか。

これらの物語は、船と河が明代の人々にとって日常の風景であり、特に江南を中心とした物語には欠かせない舞台装置であったことを物語る。日常の風景を非日常に転換させ、事件性を持たせて物語を構成する際に、船と河は劇的効果を高める大切な要素であった。

さて、運河に浮かぶ船たち。そこにはどんなドラマが起きており、これから生まれようとしているのであろうか。

4 とんがり帽子の涙

「姑蘇繁華図」には実に多くの職業が描かれる。この時代、そして蘇州という場所を考えれば、主役はやはり商人ということになるだろう。かつて商人は賤業であったが、商業経済が発達する時代の息吹の中で、そのステータスを飛躍的に上げていった。官僚機構のシステムの中にながら、賤業であり続けた者達もいる。まずは以下の場面をご覧あれ。

知事は、

「これで人殺しとわかった。まだ言いぶんがあるというのか。こやつ、打たなければ白状をせぬと見える」

といい、いそいで札を取り出して、

「打て！」

と命じた。両側に控えていた小役人が、かけ声とともに王をひき倒し、力いっぱい二十回叩いた。(明・『今古奇観』巻29「懐私怨狼僕告主」。駒田信二・立間祥介訳による)⁽⁸⁾

もう一つ。

「こやつ、理屈を言うな！」

と祁知事は言い、

「きびしく責めたてい！」

と叫んだ。法廷の上下に居並んだ鞭打ち役人が、みなハッと声をあげ、夾棍(くるぶしを責めつける刑具)を法廷の入り口めがけてほうり出すと、ふたりの者が鳳鳴岐を引き倒し、その両足を夾棍の中に挟みこんだ。祁知事は、

「わしに代わって力いっぱい締めつける！」

と命じる。(清『儒林外史』巻51。稲田孝訳

による)⁽⁹⁾

いずれもお白州、つまり法廷の場面で、拷問もて自白を迫る場面であることは、登場人物や舞台背景についてくどくど触れなくとも分かっていると思う。こういった場面が明清小説にはごまんと描かれる。さて、上の引用で「小役人」、「鞭打ち役人」として登場する下級役人だが、原文に従うならばこれは「皂隸」である。役所に勤める役人のうち最下級に属し、ここで描かれているように刑罰の執行をしたり、高官の外出にあたっては道払いを務めた。とりえず役人と説明したが、通常の役人が身につける衣服の着用を許されなかったから、実際にはその範疇外にいた。その服装は黒一色、帽子も一目でそれと分かる赤か黒のとんがり帽子をかぶっていた。「隸」という文字が物語るように、商人がステータスを上げた後も、役者とともに賤業の地位に取り残された人々である。

「姑蘇繁華図」にもこの皂隸は登場する。本絵引きでは22の「官僚の外出」、47「役所の門前」、50「試験場の門前」の各場面である。

役者は賤業ではあったが、たとえば前掲「張廷秀逃生救父」のように小説の主人公になり得た。しかし皂隸を主人公とする物語を僕は知らない。物語の中で多少派手に暴れる場面はあったとしても皂隸は常に脇役であり続け、そればかりでなく血も涙もない鞭打ち役人の役目をいつも負わされた。そして現実社会においては官僚機構の周縁に居続けた。この絵でも彼らは列の端、行列の端、門の外と常に端にたたずんでいる。本研究報告には「生活絵引」の名が冠せられているが、画中の人物たち一人一人の生活まで知るよすがはない。僕は皂隸たちのとんがり帽子を眺めるにつけ、彼らはいったいどういう人生を歩んだのだろうかと涙を禁じ得ないのである。

おわりに

「姑蘇繁華図」は写生ではない。そもそも中国絵画が伝統的に写生を志向するものではないこと、かつ皇帝に献上するという性格上、不穏なものは意図的に描かれなかったことから、写生とはほど遠い、

現実の蘇州ではなく、あるべき繁栄する都市の姿が描かれている。しかしそれゆえに典型が描かれ、同時代人の脳裏に描いた、蘇州かくあるべしというイメージを知る上では貴重な資料と言えよう。

「姑蘇繁華図」は虚構である。そして小説もまた虚構である。二つの虚構をぶつけて見た時に何か見えてくるものはないだろうか、そこに何か真実は見えてこないだろうかというのが小文の試みであった。同時代人々が共有したイメージや典型を抽出する際にはいささか効果があろうが、それをどこまで深められるかは今後の課題としたい。

さて、見るのが大好きな僕は、画中の人物が何を見ているのか、その視線の行く先が気になった。また研究会でしばしば話題になったのは、「姑蘇繁華図」を見ていると、音が聞こえてくるような場面があるということである。それは「姑蘇繁華図」の各場面が、小さな物語を孕んでいることの証でもあろう。山でのピクニックの場面、籠かきの一人は疲

れたのか一人だけうずくまっており、それを叱っているのかなぐさめているのか囲んでいる仲間達。道のあちこちでは指さして何かを話している人々。船の上の人物と、橋の上の人物が会話をしている。商店街では荷を今にも担ぎ上げようと申腰になっている男。「よいしょ」という声が聞こえてきそうである。試験場では一人だけ振り向いている受験生がいる。場内をプラカードをもった係員が回っているから、おそらくまさに試験が始まるところで、落ち着きのない彼はキョロキョロ見渡しているのであろう。このまま続けたら叱られるに違いない。さあ、試験開始だ。試験場にびっしり座った受験生たちの胸の鼓動までもが耳に響いてくるようである。視覚——見ることばかりでなく、聴覚——聞くことにまで感覚の門を開け放したら、「姑蘇繁華図」はもっと楽しく解読できるかも知れないと考えている。

(ささき・まこと)

【注】

- (1) 伊藤漱平訳『紅樓夢（上）』（中国古典文学全集24、1958年、平凡社）より。なお訳文の引用にあたってはルビを一部省略した。以下同。
- (2) 『今古奇観』は三言二拍と総称される五つの小説集からの選集であり、「唐解元玩世出奇」の出典は明・『警世通言』巻26「唐解元一笑姻縁」。本来原典の方を引くべきであるが、訳文を引用する都合上『今古奇観』から引いた。
- (3) 駒田信二・立間祥介・伊藤漱平訳『今古奇観 下・嬌紅記』（中国古典文学大系38、1973年、平凡社）より。
- (4) この小説については2005年12月26日に早稲田大学で行われた中国古典小説研究会例会において「『三言二拍』「張廷秀逃生救父」考」という題で発表させていただいた。本稿においても当日賜ったご意見を参考にさせていただいた。
- (5) 「姑蘇繁華図」における女性の不在の指摘については戴立強「『姑蘇繁華図』與『清明上河図』的比較」（人類文化研究のための非文字資料の体系化第1班編『図像から読み解く東アジアの生活文化』、神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告3、2006年）参照。
- (6) 外をのぞき見る女性という形象については、本絵引き作成メンバーである彭偉文が2008年1月26日に開催されたワークショップ「手段としての『非文字』」（第3回COE国際シンポジウムのプレシンポジウム。於：神奈川大学）において「記録手段としての絵画——「姑蘇繁華図」に描かれた女性を例として」という題でより詳細に発表している。この報告はいずれ論文にまとめられるだろう。
- (7) 吉田真弓「明代白話小説における河と船——転機、死、再生の場として」（『月刊しにか』2001年7月号）より。以下の引用も同。吉田氏の論考ではさらに白話小説中しばしば船が死と再生の場となるという、前掲「張廷秀逃生救父」の物語にも通じる興味深い指摘がなされている。
- (8) 引用書は同(3)。「懐私怨狼僕告主」の原典は『初刻拍案驚奇』巻11「悪船家計賺假屍銀 狼僕誤投真命状」。
- (9) 稲田孝訳『儒林外史』（中国古典文学大系43、1968年、平凡社）より。

「姑蘇繁華図」と蘇州の都市空間構造

巖 明

1 画卷の背景

乾隆初年の蘇州は、すでに都の北京に次ぎ、中国の第二の都市になっていた。当時の蘇州は、中国で最も大きい絹織物、綿布及び書籍の市場を有し、江南における食糧の消費と中継、及び金融、流通、出版の中心地であったほか、貴金属及び玉や漆器の加工も発達していた。そして、全国の流行をリードする服飾や履物の生産センターであり、全国、特に江南の商品の重要な集散地であった。「姑蘇繁華図」には、このような大都市の繁栄ぶりが生き生きと描かれている。乾隆年間に至り、蘇州城の東北部は絹物の生産区域となり、西北部は工業と商業の中心地で、西南部は行政中心となった。工業・商業の繁栄が続き、蘇州は江南の中心都市というだけでなく、全国で最も有名な経済都市となった。

明清時代における蘇州経済の特徴は、絹織物と綿布の貿易を中心に、各地の商人と輸送業者が集まり、多くの商人団体と各地の同郷団体ができ、蘇州府城を中心とした商業ネットワークを形成したことである。徐揚は写実的な手法で、「姑蘇繁華図」に当時の実際に存在した260余りの店舗の看板を描きこんでいる。「姑蘇繁華図」に描かれた人物や船、橋、店舗の多さは、中国絵画史上第一位であるともいえ、当時の蘇州の繁栄ぶりを鮮明に示している。特に胥門の万年橋と閶門の吊橋、山塘街の三つの部分の賑いについて、筆遣いの細かさが極致に達している。

閶門は蘇州で最初にできた八つの城門の一つで、唐代にはすでに繁華街になっていた。明清時期になって、閶門一帯はさらに繁華になり、蘇州の商業交易の中心地と物資の重要な集散地となっていた。画卷に描かれた看板から見ると、ここには布と絹織物

の卸業者が最も多く、両替店や食料問屋、薬局、雑貨店が集中しているほか、貴金属、骨董、漆器、銅または錫製品、祭祀用品、灯籠、建材、飲食などを営む店もある。取引の商品には、地元の製品のほか、山東繭綢、濮院寧綢、川廣薬材、雲貴雑貨、膠州醃猪、南京板鴨、寧波淡鯨、南河醃肉、東北人参、江西瓷器などが並び、各地の製品が揃っている。閶門の前にある吊橋の上を人々がひっきりなしに往来し、橋の下の運河には帆柱が林立する。清代初期、江南地域の綿布交易は蘇州に集中しており、特に閶門の上塘街、下塘街に多くその業者が分布していた。さらに注目に値するのは、この画卷に、数少ない壁広告が描かれており、これらは世界で最初の壁広告の物証ともなっている。

蘇州では、経済が発達し、富裕層が多く、生活水準も高く、美食に気を使い、そのため外食業が盛んであった。「姑蘇繁華図」には、食堂、軽食屋などの飲食店または食料品店も多く描かれており、蘇州で飲食業が特に発達していることを写実的に表現している。明清時代に、蘇州は名医が多いことが知られ、薬局も多かった。その歴史を記録する忠実さが珍しいといえる。

2 画卷の視野

「姑蘇繁華図」は伝統の「長巻」という形の構図を使い、太湖と蘇州城の西にある山々を背景とし、蘇州の西郊にある霊岩山から始め、山下の木洩鎮から東へ進み、横山を過ぎ、石湖を渡り、獅子山と陽山の間を抜けて蘇州城の外堀でもある運河に至り、そして運河に沿い、盤門、胥門から蘇州城へ入り、また閶門から城を出て山塘街を辿り、山塘河に沿っ

て虎丘までの間を描いている。絵には蘇州とその周辺の数十里の優美な景色が延々と連なり、両端は山を描き、中央は蘇州城で占められている。そして豊富で多彩な市民生活と習俗などを鮮明に描いている。

蘇州は古くから中国の有名な水の都であり、都市の繁栄は河川と強くかかわっている。「君到姑蘇見、人家尽枕河。古宮閑地少、水巷小橋多。」「緑浪東西南北水、紅欄三百九十橋。」「处处樓前飄管吹、家家門外泊舟航。」これらの名句は、唐代の詩人たちが水の都の蘇州を描くために詠んだものである。蘇州は中国で最も長い水路と最も多い橋を有する都市である。蘇州の水路は、都市の空間構造及び環境と密接した関係を持ち、2500年余りの歴史の間に、蘇州城と完全に融合し、蘇州という都市の生活の一部となってきた。古くから、蘇州の都市空間を構成する主要要素は水であり、山ではない。徐揚は蘇州出身で、もちろんこれを知っていた。それゆえ、彼が「姑蘇繁華図」を描くときに、運河を脈として際立たせた。大運河は昔から、蘇州の位置の安定と経済の発展に重要な役割を果たし、南北の経済と文化を繋ぐ大動脈として、蘇州の繁栄と発展を大きく促した。「姑蘇繁華図」に描かれた一村（山前村）、一鎮（木澆鎮）は、太湖周辺の町の典型的な景色を表している。

当然であるが、絵には山も見られる。蘇州は山があつて川があり、大自然の靈氣が集まるところなのである。靈巖山と虎丘は古くからの名所であり、康熙帝と乾隆帝がその度重なる江南巡幸で、いずれもこの二つの名山を散策しただけではなく、詩文も残した。徐揚が描いた靈巖山と虎丘は皇帝にこれらの愉快的な記憶を思い出させたであろう。これが徐揚が「姑蘇繁華図」を作成する目的の一つである。絵に描かれた人物や景色が繁多であり、人物の動作ないし表情が生き生きと描かれている。これらによって、当時の蘇州の景観と民衆の生活や都市の風貌が具体的に鮮明に表現し、乾隆時代の蘇州における都市と農村の社会生活を忠実に描き出したのである。

絵の万年橋から入った城内にある道前街の木柵欄に位置する江蘇按察使司の官署は、科挙試験の地方

試験である院試の試験会場になっている。江蘇の各府からの初級試験に合格した童生たちが試験場に入っており、門は門番によって厳重に守られ、見物人が門前の街に群がっている。近くの店舗が赤い紙で書いた「三場名筆」や「状元考具」などの縁起のいい札を高く掲げ、売り上げを伸ばそうとしている。明清時代の蘇州は、文化が発達し、優れた人材が多いところであり、科挙試験の成績が特に優秀であった。その理由は、蘇州の経済力にもあるが、それ以上に私塾から県学・府学・書院まで、教育機関が発達し、教育に強い関心を持つ社会的環境に恵まれたことが主な原因であった。「姑蘇繁華図」に多くの授業や勉強、試験の場面が描かれており、この試験場の場面がその代表である。

蘇州城内の学士街に、王衙弄という巷がある。ここには明の大学士の王鏊の故居があり、旧名は「怡老園」といい、清に入って江蘇布政使の官署になった。これは「姑蘇繁華図」に見られる「江蘇総藩」という大きい旗が掲げられているところである。現在の蘇州機械学校に、明代の土台の上に清代の建物が建って残っており、これが江蘇布政使官署の遺構である。明代の怡老園は夏駕湖の近くにあり、川に臨んで構えられ、城壁が水面に映され、景色が絶妙であった。多くの蘇州の文士がこの園林に集まって唱和し、蘇州文化史上もっとも輝くページを綴った。徐揚が「姑蘇繁華図」を描いたときには、怡老園がすでに布政使官署となってはいたが、絵にはまだ庭園の優美さが鮮明に残されている。注目したいのは、徐揚がここで意図的に各府・県から納められた税銀を入庫する場面を描いたことである。蘇州が朝廷にとって賦税の要地である特徴を表すほか、乾隆帝がこの場面を見て大喜びすることを狙っていたのであろう。江蘇布政使官署の正門の柱に、「帝徳如天、臣心似水」という対聯が貼ってあり、これは徐揚の真意を表すもので、この画卷において、点睛の一筆である。

3 画卷の価値

「姑蘇繁華図」を検討する際、これを「清明上河

図」と比較する人が多い。前者は清代の宮廷画家の徐揚の作品で、後者は北宋の張昞端の作品である。時代が違い、観念も異なっており、芸術の表現もそれぞれの特徴がある。「清明上河図」は簡素であり、特に街頭の人物を細かく描き、広い場面を表現すると同時に、粗末で散乱するようにならない効果を取めた。「姑蘇繁華図」は画面の細密さと場面の真実さ、そしてすべての事物を絵に納めることを追求し、当時の都市と農村の裕福と繁栄を表現することに力を尽くしている。徐揚が「清明上河図」から「長巻風俗画」という伝統形式を継承し、「散点透視法」を駆使して山水と城郭を描き、いっそう際立った芸術効果を収めた。「姑蘇繁華図」は、「清明上河図」の倍あまりの長さを有し、中国絵画史上人物を最も多く描いた作品である。

ある統計によると、この作品に4000余の人物と、2140余棟のさまざまな建物、400余艘の船と筏、50余本の橋が描かれている。ほかに、300余軒の店舗の看板があり、内容が読み取れるものが260軒を上回っている。これらの看板に示された内容及び絵に見られる店舗の分布、業界規模、商品とその産地などのほとんどが、文献の記録と一致していることがわかる。一つの都市の繁栄を描きだすために、260余軒の店舗の看板を描いたものは、明清時代の同じ種類の作品のなかでこれが唯一である。

「姑蘇繁華図」は写実絵画の貴重な作品である。その筆遣いの細かさは驚くほどで、率直でありながら細心であり、自然でありながら工夫を凝らした文化精神を反映している。蘇州は古くから水産物や米を多く産する豊かな土地であり、精細な作業が、経済と文化の形を作る最も基本的で強い要素として、蘇州の社会と文化に深遠な影響を与えてきた。蘇州一帯の米は精細な品質を持ち、天地の靈気を凝縮し、入念な耕作によってできた精華である。蘇州の人々の精巧さ、敏腕さ（精幹）、洗練さ（精練）、緻密さ（精緻）、賢さ（精明）、誠実さ（精誠）を併せ持った個性と態度ができ、そして蘇州の特産品の精美、飲食の精良、演技の精細にまで影響を及ぼした。蘇州の人々が精細さと優美さを追求し、精巧で緻密な物を好み、そこから蘇州的な風格が生まれた。これ

は、徐揚がその「姑蘇繁華図」に新機軸を打ち出し、独創性を見せた根本の原因である。そして、「姑蘇繁華図」の精確で細緻な記録としての価値は、社会の各階層を描いた所にも見える。明清の絵画作品は多いが、そのほとんどは帝王将相または高官や大商人などの上層階級のことを記録し、都市に住む手工業者または物売りや使い走り、雑役夫などに視線を向けることが甚だしく少なかった。明清の江南の町々は、全国の経済の中心であったばかりでなく、文化の中心でもあった。しかし、これらの町の発展と文化の繁栄に重要な役割を果たした多くの有能な職人たちが、往々にして画家たちに無視されていた。「姑蘇繁華図」が蘇州の都市生活を記録する時に、彼等を極めて多く描き出し、中にはあらゆる階層と職業の人がおり、その多くは普通の市民であった。都市生活を忠実に記録することにおいて非常に貴重な絵画資料としての価値を有している。

絵の着想から見れば、「姑蘇繁華図」の画面構成が蘇州の園林の空間構造に極めて似ている。蘇州で園林を作る時の意図は、まず賑やかな都会から離れ、都会の喧騒の中にいながら、その悪に染まることなく、高い塀に囲まれた有限な空間で、静かで優雅な生活を楽しんだ。明清時代の蘇州の特に発達した文人詩と文人画が、園林の造営に最もいい環境をなした。園林の建造にあたる人のほとんどが、高いレベルの文化を持ち、作詩と絵画に優れ、芸術の奥義を極めたものであった。蘇州の園林は明清時代の中国人にとって理想的で完璧な居住条件と生活環境を代表しており、園林と住宅が一体になり、観賞、遊覧、居住の多くの機能を併せ持っている。このような建築形式ができた理由は、蘇州の人々が自然を慕い、自然と和やかに付き合いたいためで、住居環境を美化して完備させる一種の芸術的な創造なのである。徐揚の「姑蘇繁華図」に多く描かれた民家や邸宅は、蘇州一帯の都市と農村の園林建築を代表する最もいい例である。

徐揚が「姑蘇繁華図」（原題「盛世滋生図」）を描いた目的は、清初以来の「治化昌明、超軼三代、幅員之広、生齒之繁、亘古未有」に感心し、かつ乾隆帝の度重なる江南巡幸と「尤重実録」の審美に影響

されたのである。宮廷画家としての徐揚が乾隆帝の賛賞を得たいと願うのは極めて自然であった。それゆえ、彼がこの絵で蘇州の繁栄と豊かさを極度に誇張し、国家が安定し民が安らかな太平無事の世を表現しようとしたあまり、盛世を謳歌することに行き過ぎた、真実と違う場面を描いたところが見られる。例えば、彼の描いた蘇州市民のほとんどが、官服と官員の帽子を身につけており、平民と官僚の区別は、長着と帽子に官位を示す飾りの有無だけである。清代中期、蘇州に住む退隠した官員が多く、大商人も金を納めれば官職を獲得できたが、絵にあるように街のいたるところに見られるほど多いわけではなかった。これは明らかに太平を誇張し、真実さを失った結果である。そして、明清時代の蘇州には、全国で最も発達した風俗業があり、都市の娯楽がかなり多様であった。唐寅が閶門を謳う詩に、「翠袖三千

楼上下、黄金百万水西東。」という詩句があった。しかし、青楼や妓院については「姑蘇繁華図」にはまったく示されておらず、乾隆年間に、蘇州閶門の妓院がすべて取り締まられたように思われかねない。このような描き方は、乾隆帝を喜ばせることができるが、明らかに虚偽で粉飾であり、歴史文献に对照させれば、真実とまったく違うのである。この二つの問題を挙げたのは、「姑蘇繁華図」があくまでも絵画作品であることを理解するために過ぎない。全体的にみれば、「姑蘇繁華図」が写実的な傑作の名に相応しいものであり、「乾隆の盛代」の蘇州の都市空間を研究するための具体的な資料であると同時に、非常に珍重に値する芸術作品であり重要な文化遺産である。

(訳 彭偉文)

(げん・めい)

参考文献目録

本書の語句キャプションおよび読取り解説執筆に際して参考とした文献を、著者名の五十音順に配列した。同一著者の文献は、発行年次順とした。著者・編者と発行所が同じ場合は、発行所の記載を省略した。なお、中国語文献についても、日本語の音読みによった。

- 青木正児（小川環樹解説） 2003『江南春』平凡社
浅田泰三 1997『中国質屋業史』東方書店
伊原弘 1993『蘇州—水生都市の過去と現在』（講談社現代新書）講談社
伊原弘編 2003『清明上河図をよむ』勉誠出版
亦然 1999『蘇州小巷』蘇州大学出版社
袁景瀾 1998『呉郡歳華紀麗』（江蘇地方文献叢書）江蘇古籍出版社
王衛平・王国平主編 2004『蘇南社会結構変遷研究』北京図書館出版社
王稼句 2000『蘇州山水』蘇州大学出版社
王稼句編 2005『蘇州文献叢鈔初編（上下）』古吳軒出版社
王稼句編 2002『三百六十行図集（上下）』古吳軒出版社
王冠倬編 2000『中国古船図譜』三聯書店
王圻・王思義編集 2005『三才図会（上中下）』上海古籍出版社
王孝清主編 2003『中国伝統建築術語辞典』建築情報季刊雑誌社
王国奇 2005『河南古代橋梁』中州古籍出版社
王自強主編 2002『中国古地図輯録・康雍乾盛世図（1-3）』星球地圖出版社
王爾敏 2002『明清時代庶民文化生活』岳麓書社
王舎城美術宝物館編 1986『蘇州版画』王舎城美術宝物館
王樹村編著 2006『中国店舖招幌（英語版）』外文出版社
王伯敏（遠藤光一訳） 1996『中国絵画史事典』雄山閣
王文宝編著 2002『叫吹与招幌』同心出版社
西和夫 1990年『日本建築はどうつくられているか』彰国社
織野英史 2001「もう一つの継櫓—江南水郷の櫓と櫓—」日本民具学会『民具研究』124号
郭孝義主編 1990『江蘇航運史：近代部分』人民交通出版社
郭澗溪 1996『中国民間遊戯与競技』上海三聯書店
川勝守 1999『明清江南市鎮社会史研究—空間と社会形成の歴史学』汲古書院
喜多祐士外 1992『蘇州版画—中国年画の源流—』駸々堂
姜彬主編 1996『稻作文化与江南民俗』上海文芸出版社
曲彦斌 1993『中国典當史』上海文芸出版社
金友理（薛正興校点） 1998『太湖備考』（江蘇地方文献叢書）江蘇古籍出版社
計成（趙農注釈） 2003『園冶図説』山東画報出版社
阮儀三主編 2000『江南古鎮』上海画報出版社
阮儀三 2002『江南六鎮』河北教育出版社
阮長江編 2001『新編中国歴代家具図録大全』江蘇科学技術出版社
嚴麗娟編・秉琨執筆 1988『清・徐揚「姑蘇繁華図」（附紹介與欣賞）』商務印書館
洪煥椿編 1988『明清蘇州農村經濟資料』江蘇古籍出版社
黃時鑑編 1999『十九世紀中国市井風情 三百六十行』上海古籍出版社
黃能馥・陳娟娟 1999『中華歴代服飾芸術』中国旅游出版社
高福民主編・周矩敏絵 2003『百俗図』上海人民美術出版社
午采編・李峰整理 2003『新刊京版工師雕斫正式：魯班経匠家鏡』海南出版社

- 故宮博物院編 2002『清史図典 (1-12)』紫禁城出版社
- 故宮博物院編 2006『清代宮廷版画』紫禁城出版社
- 吳秀之・曹允源等編 1970『江蘇省・吳県志』成文出版社有限公司
- 顧翔・殷岩星 2004『新郭・春草正芳菲』東南大学出版社
- 顧震濤 1999『吳門表隱』(江蘇地方文献叢書) 江蘇古籍出版社
- 国家図書館分館編 2003『清末民初報刊図画集成 (1-20)』全国図書館文献縮微複製中心
- 国家図書館分館編 2003『清末民初報刊図画集成続編 (1-20)』全国図書館文献縮微複製中心
- 顧 祿 1999『清嘉録』(江蘇地方文献叢書) 江蘇古籍出版社
- 崔晋余主編 2004『蘇州香山幫建築』中国建築工業出版社
- 蔡利民 2000『蘇州民俗』蘇州大学出版社
- 上海市戲曲学校中国服装史研究組編 1984『中国歴代服飾』学林出版社
- 上海図書館近代文献部 2000『清末年画彙萃：上海図書館館藏精選』人民美術出版社
- 周嘉胄(田君注釈) 2003『裝潢志図説』山東画報出版社
- 周心慧主編 2000『古本小説版画図録(修訂増補本) 1-5』学苑出版社
- 周成編著 1995『中国古代交通図典』中国世界語出版社
- 周宝珠 1997『<清明上河図> 与清明上河学』河南大学出版社
- 焦秉貞繪 1999『耕織図』北京図書館出版社
- 焦秉貞繪 2002『御製耕織図』線装書局
- 尚秉和 2001『歴代社会風俗事物考』中国書店
- 尚秉和(秋田成明編訳) 2004『中国社会風俗史』平凡社
- 徐剛毅主編 2001『老蘇州・百年歷程(上下)』江蘇古籍出版社
- 徐允權編著 2005『天堂水城：蘇州護城河覽勝』古吳軒出版社
- 徐卓人 2004『盤門・龍蛇盤水陸』東南大学出版社
- 清宮散佚国宝特集編輯委員会編集 2004『清宮散佚国宝特集 書道卷・絵画卷』中華書局出版
- 沈寂主編 1997『三百六十行大観：名家絵図本・中国伝統行業図集』上海画報出版社
- 沈從文編著 1993『中国古代服飾研究・増訂本』商務印書館(香港)
- 張宝 1988『泛槎図』北京古籍出版社
- 陣内秀信・岡本哲志編著 2002『水辺から都市を読む一舟運で栄えた港町』法政大学出版局
- 石汝傑・宮田一郎主編 2005『明清吳語詞典』上海辞書出版社
- 宋応星(藪内清訳注) 1969『天工開物』(平凡社東洋文庫) 平凡社
- 宋応星(鍾広言注釈) 1978『天工開物』中華書局
- 宋樹友主編 2001『中華農器図譜(1-3)』中国農業出版社
- 宋俊華 2003『中国古代戲劇服飾研究』廣東高等教育出版社
- 宋兆麟・高可主編 2004『中国民族民俗文物辞典』山西人民出版社
- 蘇州市城建档案馆・遼寧省博物館編 1999『姑蘇繁華図』文物出版社
- 蘇州市地方志編纂委員会弁公室編 1999『老蘇州・百年旧影』江蘇人民出版社
- 蘇州靈巖山寺編 1994『蘇州靈巖山志』蘇州靈巖山寺
- 蘇利 2004『道前街・風煙十万家』東南大学出版社
- 戴吾三編 2003『考工記図説』山東画報出版社
- 高村雅彦 1995「戲台及び演劇空間の構成について—中国江南の水郷都市研究その1—」『日本建築学会計画系論文集』第473号
- 高村雅彦 1996「鎮の都市構造と住居形式の関係について—中国江南の水郷都市研究その2—」『日本建築学会計画系論文集』第481号
- 瀧本弘之編 2003『中国古典文学挿画集成4：金瓶梅・紅樓夢』游子館
- 武田雅哉 1995『桃源郷の機械学』作品社
- 中央研究院近代史研究所編 2003『生活、知識與中国現代性』(中央研究院近代史研究所集刊)
- 中央研究院近代史研究所編 2005『明清社会與生活』(中央研究院近代史研究所集刊)

- 中国国家博物館編 2003『文物中国史8：明清時代』山西教育出版社
 仲富蘭主編『図説中国百年社会生活変遷（服飾・飲食・民俗）』学林出版社
 仲富蘭主編『図説中国百年社会生活変遷（礼儀・郷情・宗教）』学林出版社
 張英霖・馬宝傑執筆 遼寧省博物館監製 2006『清・徐揚 姑蘇繁華図 賞析』北京東方博古文化芸術
 発展有限公司
 張英霖主編 2004『蘇州古城地図』古吳軒出版社
 張寔馭 2003『中国城池史』百花文芸出版社
 張奇明主編 2001『点石齋画報・大可堂版（1-15）』上海画報出版社
 張曉旭 2000『蘇州碑刻』蘇州大学出版社
 趙広超 2004『筆記「清明上河図」』三聯書店
 張国標編 1996『徽派版画芸術』安徽美術出版社
 張壬士輯 1983『江蘇省・木澆小志』成文出版社有限公司
 張徳宝・龐先健繪 完顏紹元・郭永生文 1999『中国風俗図像解説』上海書店出版社
 張風綱編・楊炳延主編 2003『旧京醒世画報：晚清市井百態』中国文聯出版社
 陳高華・徐吉軍主編 2002『中国服飾通史』寧波出版社
 陳從周編著 2003『蘇州旧住宅』上海三聯書店
 陳望塵 2004『吳門橋・城南話滄桑』東南大学出版社
 陳宝良 2004『明代社会生活史』中国社会科学出版社
 丁秀山 1988『東方選書15 中国の冠婚葬祭』東方書店
 童榮繪・許志浩編 2003『太平歡樂図』学林出版社
 中川忠英（孫伯醇・村松一弥編） 1966『清俗紀聞』（平凡社東洋文庫）平凡社
 橋場信雄 1980『建築用語図解辞典』理工学社
 范金民（岩井茂樹訳） 2003『清代蘇州都市文化繁栄の実写—「姑蘇繁華図」』都市文化研究2号
 範金民主編『江南社会經濟研究：明清卷』中国農業出版社
 範成大（小川環樹訳 山本和義・西岡淳解説） 2001『吳船録・攬轡録・驂鸞録』平凡社
 付起鳳、付騰龍 1989『中国雜技史』上海人民出版社
 文震亨（荒井健他訳注） 1999『長物志—明代文人の生活と意見（1-3）』平凡社
 濮安国 1999『明清蘇式家具』浙江摄影出版社
 町田市立博物館編 1993『農耕図と農耕具展』町田市立博物館
 町田市立博物館編 2000『たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御精耕織図』町田市立博物館
 町田市立博物館編 2002『養蚕機織図』町田市立博物館
 『木澆鎮志』編纂委員会編 1999『木澆鎮志』上海社会科学院出版社
 熊月之・熊秉真主編 2004『明清以来江南社会与文化論集』上海社会科学院出版社
 楊循吉等（陳其弟点校） 2004『吳中小志叢刊』広陵書社
 楊新外 1997年『中国絵画三千年』中国外文出版社
 葉大兵・烏丙安主編 1990『中国風俗辞典』上海辞書出版社
 藍翔・馮懿有 2003『中国・老360行（上下）』百花文芸出版社
 李漁（王連海注釈） 2003『閑情偶寄図説（上下）』山東画報出版社
 陸肇域・任兆麟編纂 1995『虎阜志』古吳軒出版社
 李孝悌編 2005『中国的城市生活』聯経出版股份有限公司
 李士豪、屈若拳 1984『中国漁業史』上海書店
 李昭祥 1999『龍江船廠志』（江蘇地方文献叢書）江蘇古籍出版社
 李銘皖・馮桂芬等編 1970『江蘇省・蘇州府志』成文出版社有限公司
 劉 森 1996『明清沿海蕩地開發研究』汕頭大学出版社
 劉徐州編 2004『趣談中国戲楼』百華文芸出版社
 劉翠溶・石守謙主編 2002『第三屆國際漢学会議論文集 歷史組：經濟史、都市文化與物質文化』中央
 研究院歷史語言研究所

- 劉春迎 2004『北宋東京城研究』科学出版社
- 劉托・孟自主編 1998『清殿版畫彙刊(1-16)』学苑出版社
- 劉敦楨 2004『中国住宅概説』百花文芸出版社
- 劉敦楨編集・陳從周校訂 1953『中国建築史参考図』南京工学院・同濟大学建築系合印參考資料
- 梁思成主編 1999『中国建築芸術図集(上下)』百花文芸出版社
- 遼寧省博物館・中国歴史博物館・蘇州市地方誌編纂委員会編 1986『盛世滋生図』文物出版社
- 盧永春・鈴木充・三浦正幸 1998「清代の江南地方の水辺都市空間—『盛世滋生図』に見る蘇州とその近郊における考察—」『日本建築学会計画系論文集』第506号
- 盧群 2000年『千年閶門』蘇州大学出版社
- 盧輔聖主編・邵彥文 2006年『中国山水画通鑑・皇輿攬勝』上海書画出版社
- 路甬祥総主編 張秉倫・方曉陽・樊嘉祿 2005年4月『造紙与印刷』大象出版社
- Lou, Qingxi 2003年12月『Chinese Gardens』Chinese International Press
- 絵 王克友・王宏印 許海燕訳2003年2月『北京民間風俗百図 珍藏版』北京図書館出版

索引

図版に付けた事物・行為についての語句キャプションを五十音順に配列した。
図版番号—語句キャプション番号の形式で表示した。

あ

- アーチ (拱券) ……3-44、7-43、32-37、45-6
 アーチ型の屋根 (棚頂) ……27-2
 アーチ門 ……44-12
 挨拶を交わす ……21-27、23-36、24-26
 相槌を打つ (打鉄) ……17-15
 赤い絹 (紅綾) ……41-3
 赤い靴 ……5-44
 赤い扱き帯 (紅汗巾) ……49-18
 赤い風呂敷 ……27-37
 赤い帽子 (紅帽) ……22-57、47-18、48-11、49-20
 明かり窓 ……25-68
 赤蠟燭 (香燭) ……18-20
 赤ん坊をあやす ……5-13、14-24
 赤ん坊を抱く ……14-23、18-57、35-29
 胡坐 (盤腿坐) ……2-30
 上げ蓆 ……14-2
 総角 ……3-59、5-43
 葦 ……5-41、13-47
 足 (柜脚) ……18-38
 網代垣 ……9-27、13-19
 網代帆に腰掛ける ……1-46
 足を組む ……43-16
 四阿 (亭) ……19-40、40-20
 畦 ……9-23、34-33
 穴が開いた藁帽子 ……5-20、16-10
 鏡 ……3-51、20-12、22-49
 油売り (売油郎) ……27-14
 油屋看板「小磨香油」 ……31-62
 雨覆 (滴水) ……18-3
 雨傘 ……39-9
 雨戸 ……21-13
 網干し ……5-1、16-1
 網を操作する ……9-30
 歩み板 ……1-45、3-4、8-59、21-55、25-65、39-23、50-35
 筏 ……6-4
 錨 ……6-2、12-20、37-54、41-24
 錨かけ (錨架) ……37-56
 居酒屋看板「酒館」 ……44-14
 石台 ……38-16
 石段 (踏歩) ……18-29、32-41
 石段 (踏蹠) ……3-53、18-28、28-13、33-44、46-7、48-16、49-21
 石に座る ……15-23
 石の欄干 ……19-24、20-31、28-15、31-27、49-16
 石橋 ……3-42
 石塀 ……13-32
 椅子 ……6-30、11-38、30-25、37-21
 椅子カバー (椅套) ……33-22
 板戸 (木排門板) ……21-13
 板戸 (木板門) ……4-33
 板張り (木板牆) ……27-42
 板葺 ……17-4
 板塀 (圍牆) ……9-3
 板屋根 ……51-5
 井戸 ……4-27、14-30、51-48
 井戸側 (井口石) ……4-29、51-50
 犬 ……1-16
 荷物を抱えて運ぶ ……39-24
 入母屋 ……7-4、9-10、13-18、34-7、36-23、45-33
 飲食店 ……36-27
 植木鉢 (盆花) ……6-23、38-7、41-30
 牛飼い ……9-20、13-40
 後ろ手を組んで絵を観る ……39-2
 卯建 (風火牆) ……21-2、22-2、23-1
 打掛 (披風) ……42-11
 団扇 (蒲扇) ……3-30
 腕を組む ……2-37
 馬 ……3-1、48-43
 裏口 ……21-57、27-43
 裏口 (小門) ……21-52、51-46
 裏口からうかがう女性 ……21-58
 占い師 ……26-14、28-46、29-25、30-24
 占い師看板「命相」 ……44-13
 占い店 ……26-15
 上着 (外套) ……2-44、6-38、7-19、8-21、19-11、21-34、22-75、23-24、25-24、28-48、29-27、30-6、31-29、32-46、33-48、34-50、35-6、36-16、38-40、39-5、41-4、42-52、48-39、49-13、51-11

上着 (短衣) ……3-56、4-5、6-34、8-51、10-32、16-12、19-36、23-30、24-43、26-21、28-9、30-11、31-13、32-52、34-63、35-35、38-18、39-18、41-44、42-47、43-23、51-56
 上衣 (短衫) ……8-28
 上着 (長衫) ……15-27
 上着 (馬褂) ……10-41、11-27、39-37
 「雲岩寺塔」……44-1
 雲鑑 ……42-16
 餌 ……14-10
 絵を指しながら話す……39-7
 宴会 ……32-29
 縁台 (板凳) ……15-26、30-17
 円盤状の銀塊……48-7
 演武庁……46-5
 大型船 ……6-1
 大槌 (大鉄錘) ……17-17
 大道具 ……33-33
 大棟 (屋脊) ……10-45、14-34、15-8、17-40、18-6、21-38、22-4、23-12、25-3、28-41、29-3、33-55、34-1、35-25、36-20、38-11、39-32、45-34、48-2、49-2、50-25、51-34
 岡持 (食盒) ……43-8
 桶 ……21-62
 桶の取っ手 (提手) ……4-21
 桶を天秤棒で担ぐ……2-55
 お辞儀をする……42-3
 男の子 ……10-39
 踊り子……35-1
 帯 (腰带) ……6-36、8-56、22-59、23-31、26-53、28-10、30-21、31-14、32-53、38-19、39-19、42-48、43-12
 帯棧 (抹頭) ……14-46
 お触れ「蘇州府示 催趲重運・不得停泊」……25-59
 お触れ「蘇州府示 禁止夜行・小心火燭」……25-60
 重い荷を担ぐ……31-45
 母屋 ……51-40
 錘 (墜子) ……4-26
 親方 ……17-21
 親柱 (橋欄柱) ……7-40
 親柱 (扶梯柱) ……37-26
 折畳み椅子 (折椅) ……22-40
 折り畳んだ網代帆 ……1-19、3-10、25-76、35-27、41-37
 折り畳んだ帆……12-2
 織物 (布帛) ……7-56
 下ろされた帆……24-40、31-61、39-36
 女船頭……2-53
 女の子 ……10-31

か

櫂 (槳) ……1-3、2-48、16-28
 階段 (台階) ……10-53
 外庁 ……42-37
 買い物をする……32-44
 カウンター (柜台) ……21-31、22-24、23-6、25-40、29-21、37-15、40-10、45-29
 華蓋 ……22-61、49-11
 抱える ……22-33
 鏡板 (環板) ……14-47
 鏡研ぎ屋……19-9
 鉤 (掛鈎) ……4-19
 垣根 ……13-44
 垣根 (籬笆) ……4-10
 下級役人 (皂隸) ……22-56、47-17、48-9、49-17
 額「義学」……51-6
 額「呉中天府」……50-10
 額「春申旧蹟」……50-11
 額「福国佑民」……18-9
 額「万年橋」……19-51、20-21
 額「吏科」……49-33
 額「轅門」……47-10
 額「閭門」……45-48
 楽師 ……33-38、34-16
 学生 ……10-1、11-34、51-30
 楽隊 ……41-18、47-12
 掛け軸 (水墨山水画) ……38-3
 掛け軸「太平」……18-17
 掛け軸「醜壇」……18-18
 駕籠 ……43-18
 籠 (竹籃) ……4-44
 籠 (筐) ……8-9
 籠 (籬) ……2-29、10-23、28-8、41-27
 駕籠かき ……43-19
 笠 ……2-47、4-14、6-33、8-60、11-7、15-21、19-4、20-16、21-59、24-46、25-29、26-73、27-35、28-32、29-33、31-60、34-59、43-21、51-55
 重ね ……37-49
 飾り (彩穂) ……27-10
 飾り用暖簾 (彩綱) ……33-13、42-18、49-5、50-5
 飾り用の提灯 (彩燈) ……41-8、42-27
 舵 ……1-52、2-7、3-38、5-7、6-3、8-2、12-26、28-34、34-65、35-31、37-57、40-15、44-21
 鍛冶屋 (鉄匠舗) ……17-3
 舵を操作する……13-43
 舵を取る……19-61、28-33

- 「花神廟」……………44-9
 葛石（階条石）……………18-26、33-42、42-41、51-15
 画仙紙……………43-3
 潟……………13-46
 担げる……………20-22、22-22、23-22、25-54、27-32、31-28
 刀かけ……………48-12
 肩にかける……………4-45
 肩につかまる……………5-28
 片膝をつく……………11-3
 肩を組む……………6-32
 楽器を演奏する……………38-1
 滑車（旗竿斗）……………46-9、47-1
 花頭窓……………18-11
 金床（鉄砧）……………17-24
 鉗……………17-22
 花瓶……………35-7、38-33
 兜（柱頭）……………7-41
 株の残った水田……………9-26
 壁……………4-31、17-44
 竈（立竈）……………37-34、39-29
 紙……………51-18
 髪飾り……………8-47
 甕……………6-8、15-17、24-38、26-68、32-4
 甕に寄りかかる……………15-16
 鴨居……………18-16、21-12、22-10、25-38、28-28、
 29-17、36-56
 唐傘……………13-2
 絡げた裾……………7-27、10-24、19-33、21-44、43-24
 唐戸（榻扇）……………14-42、42-38
 川の水を汲む……………15-1
 側柱（檐柱）……………33-26
 瓦……………11-2
 瓦座（封檐板）……………10-47、14-36、18-8、20-1、22-7、
 23-14、25-6、26-3、28-20、29-7、30-3、33-10、35-
 23、42-33、49-26
 瓦の列（瓦壘）……………51-37
 瓦の列の間の溝（当溝）……………51-39
 瓦葺（瓦房）……………15-7、17-29
 瓦屋根 ……9-9、10-46、12-9、13-22、14-35、18-7、21-32、
 22-5、23-13、24-2、25-5、26-1、28-19、29-4、30-1、
 33-1、35-22、36-21、…38-10、39-31、41-58、42-32、
 44-17、47-14、48-3、49-24、50-3、51-35
 瓦屋根（卷棚頂）……………7-3
 瓦屋根（卷棚歇山頂）……………33-3
 瓦屋根門……………38-31
 瓦を葺く……………11-6
 河を眺める女性……………1-14
 河を見る……………32-43
 官位を示す飾り（補子）……………22-44、33-19
 喧嘩する雄鶏……………4-17
 観客席（看楼）……………34-43
 観客席で観劇する女性……………34-44
 観客席にいる子供……………34-47
 官船……………1-8、3-8、24-24、25-67
 門……………14-6
 観音開きの木戸（対開板門）……………14-5
 楽器店看板「鳳鳴齋」……………26-43
 看板（招牌）……………7-49、17-35
 看板「睿清菜油」……………48-29
 看板「浦城煙行」……………25-64
 看板「浦城建煙」……………10-14
 看板「雲貴川広各省雜貨」……………22-18
 看板「雲貴川広雜貨老行」……………26-19
 看板「永盛」……………29-11
 看板「各種」……………36-34
 看板「各色花卉」……………32-23
 看板「各色雅扇」……………41-49
 看板「各色名烟」……………39-30
 看板「官塩」……………28-29
 看板「漢府八糸」……………20-19
 看板「丸散膏丹」……………31-7
 看板「顔料」……………36-33
 看板「客寓」……………24-19
 看板「宮紬繭綢」……………20-17
 看板「牛油燭」……………31-2
 看板「桐油」……………28-36、48-27
 看板「金銀首飾」……………25-51、36-48
 看板「銀硃」……………36-38
 看板「靴舗」……………48-45
 看板「古今書籍」……………26-64
 看板「湖縐綿綢」……………26-70
 看板「公文客寓」……………47-6
 看板「考具」……………50-23
 看板「扣布」……………29-18
 看板「膠州醃猪老行」……………31-47
 看板「香燭」……………18-50
 看板「香水浴室」……………22-73
 看板「細貨」……………27-9
 看板「雜貨」……………10-29
 看板「雜貨行」……………22-27
 看板「雜貨老行」……………25-61、26-26
 看板「三場名筆」……………50-8
 看板「三鮮大麵」……………36-28
 看板「四時盆景」……………32-22

看板「子淨棉花」	22-66	看板「猪行」	24-32
看板「紙張發客」	25-58	看板「朝冠」	23-38
看板「試卷」	50-24	看板「紬行」	36-39
看板「磁器」	50-27	看板「定織細席」	18-53、32-19
看板「漆器」	32-14	看板「定洒上赤金箋」	36-61
看板「柴炭老行」	24-22	看板「釘鍊」	28-37
看板「紗燈」	22-38	看板「点心」	31-18
看板「紗緞」	23-9	看板「登樓看貨」	25-62
看板「錫器老店」	31-23	看板「燈籠店」	22-36
看板「手巾老行」	36-47	看板「內店人參」	25-39、31-6
看板「純銅鐵器」	25-83	看板「南河醃肉」	31-48
看板「書坊」	26-55	看板「南貨」	18-55
看板「松江加長扣布」	36-62	看板「南京板鴨」	31-49
看板「松江大布」	22-64	看板「寧波淡鯊」	31-50
看板「松江標布」	26-6	看板「白鯊銀魚老行」	31-37
看板「松蘿茶室」	26-39	看板「盤盒」	32-15
看板「燒酒」	50-31	看板「皮貨行」	23-17
看板「粧蟒大緞」	20-18	看板「皮貨發客」	23-34
看板「上江青炭」	48-32	看板「秘製小菜」	26-48
看板「上赤真金」	36-60	看板「琵琶絃子」	26-46
看板「上卓饅頭」	41-55	看板「筆」	50-29
看板「狀元考具」	50-13	看板「不二價」	25-22
看板「神相」	29-24	看板「富盛」	36-41
看板「進京貢緞」	23-8	看板「布行」	22-68、31-41、36-46
看板「震沢紬行」	36-51	看板「復興老行」	22-28
看板「崇明大布」	36-65	看板「米行」	21-28
看板「成造田器」	17-5	看板「包辦酒席」	41-60
看板「生漆」	48-25	看板「法帖」	50-30
看板「精潔餛飩」	26-32	看板「帽行」	23-37
看板「精巧錫器」	31-24	看板「帽舖」	23-40
看板「川貝陳皮」	26-50	看板「本莊」	29-19
看板「川広藥材」	25-63	看板「滿帽」	23-39
看板「選製官窯各款磁器」	31-52	看板「名酒」	28-39、50-28
看板「錢莊」	18-54、28-42、32-56、36-43	看板「名人字畫」	40-7
看板「蘇杭雜貨」	41-47	看板「命館」	22-21
看板「搜精卜易」	26-16	看板「命相通神」	26-13
看板「太倉棉花」	22-65	看板「棉花」	29-10、47-41
看板「大雅堂書坊」	26-63	看板「棉花行」	22-62
看板「大通号」	22-63	看板「綿紬老行」	26-71
看板「大肉饅頭」	37-30、39-27	看板「麵館」	36-32
看板「大布」	29-20	看板「藥材」	36-45
看板「兌換金珠」	25-41、36-50	看板「糧食油酒」	37-11
看板「兌換錢莊」	25-78	看板「糧食油酒豆餅老行」	24-7
看板「丹粉」	36-36	看板「老紬行」	36-57
看板「地道藥材」	31-8	看板「六壬神數」	26-12
看板「茶」	50-22	看板「和合館」	37-18
看板「茶食」	31-19	看板「哩吱羽毛」	20-4

- 看板「胭脂宮粉」……………27-5
 冠木 ……………51-7
 官僚 ……………22-43
 黄色い外壁 ……………18-10
 木桶 ……………7-25
 鬼谷子の掛け軸 ……………28-45
 岸 ……………4-1
 素地の乾燥 ……………16-21
 素地の成形 ……………16-14
 儀仗 ……………3-27、41-26
 儀仗兵 ……………47-20
 素地を運ぶ ……………16-22
 煙管 ……………2-25、10-13、15-22、30-19、32-57
 基壇（台基）……………12-12、18-24、33-41、42-39、45-43、
 46-6、49-15、51-14
 木槌 ……………6-6
 木に座る ……………4-15
 木に登って観劇する ……………34-54
 絹傘 ……………24-41
 絹張りの提灯（紗燈）……………8-10、33-35、34-23、
 41-56、42-15
 木の棒 ……………16-17
 木の欄干 ……………19-22、20-34、21-5、27-53、34-69、
 37-5、45-19
 木箱 ……………31-56
 木橋 ……………4-37、13-26
 客 ……………8-11、19-3、29-31、34-30、35-8、36-31
 脚絆（綁腿）……………3-2、7-28、8-61、10-6、15-36、18-41、
 19-37、22-69、25-42、26-54、27-34、36-9、38-22、
 39-21、41-45
 給仕 ……………10-19、32-31
 給仕する召使い ……………33-47
 急須（茶壺）……………6-28
 橋脚（橋墩）……………3-45、13-25、32-39
 教師 ……………11-33、51-31
 拱手の礼をする ……………19-48、21-25、42-44、
 「御書亭」……………44-7
 切り石（条石）……………3-43、15-39、32-38、36-2、45-4
 切り石積み（条石岸）……………21-37、25-31、28-16、
 37-2、50-34
 切妻（山牆）……………9-5、11-1、12-8、13-29、14-49、15-9、
 17-41、18-49、21-51、25-19、28-44、29-5、33-6、
 44-16、45-30、49-4、50-14、51-41
 麒麟 ……………47-16
 木枠（模匣）……………16-18
 銀塊を入れた桶……………48-8
 金銀を量る天秤（天平）……………20-5、21-30、22-14、
 28-30、48-6
 杭 ……………6-10
 くぐり戸（月門）……………51-45
 くぐり門……………4-35
 楔 ……………11-19、26-36
 草葺の日除け（涼棚）……………10-16、17-6
 草屋根 ……………9-4、13-30
 鎖（鉄鏈）……………17-11
 鎖（錨鍊）……………37-55
 薬玉（彩球）……………33-37、34-26、41-16、42-19、
 49-6、50-6
 薬屋 ……………31-3
 薬屋看板「薬酒」……………31-5
 降り棟（垂背）……………7-6、19-43、34-5、36-22、45-36、49-3
 靴下（襪子）……………8-58、11-29、22-34、24-45、
 31-34、43-13
 靴店看板「三進齋」……………48-33
 寛ぐ ……………15-20
 轡 ……………3-47、20-9、22-50
 熊手鍬（鉄搭）……………17-8、48-26
 熊手鍬・四本鍬 ……………13-20
 汲口（井口）……………4-28、51-49
 鞍 ……………3-50、20-13
 鞍橋 ……………22-46
 九輪 ……………44-2
 黒犬 ……………2-19
 黒い帽子（黒帽）……………22-58、47-19、48-10、49-19
 鍬（鏝）……………16-15、17-9
 鍬先 ……………17-14
 磬鐸 ……………12-14
 刑具 ……………13-13
 刑具（笞杖）……………22-70
 経車 ……………14-14
 繫船柱（後將軍柱）……………2-5
 繫船柱（將軍柱）……………1-30、3-20、25-69、37-42、
 38-27、41-23
 芸を眺める ……………36-37
 蹴込板（起歩）……………37-28
 袈裟 ……………28-12
 桁 ……………11-13、21-9
 桁石 ……………27-54、37-6、45-20
 桁型の石橋（方孔石橋）……………37-4、45-18
 桁木 ……………4-41
 月鼓 ……………41-20
 蹴放し ……………10-52
 建材問屋看板「磚瓦石灰」……………31-54
 見物する ……………27-22

合格者掲示板 (榜) ……50-19
合格発表を見る人 ……50-20
格狭間 (簾架心) ……14-43
格子 ……14-44、47-11、51-43
格子戸 (榻扇) ……11-22、13-24、17-42、51-44
格子窓 (檻窓) ……7-7、8-34、17-30、21-7、26-17、
27-44、29-13、35-18、36-42、44-27、47-4
甲板 ……1-41、5-18、8-15、37-43
甲板に座る ……8-35
高欄 (欄杆) ……37-38、45-42
香炉 ……18-23
肥桶 ……13-33
小壁 (門頭板) ……21-11、22-9、25-37、28-27、36-55
穀物容器 (草畚) ……21-29、37-13
莫蔭 (蓆) ……8-27、32-17
莫蔭専門店 ……32-16
莫蔭を敷く ……1-18、3-12
莫蔭を開いてみる ……32-18
腰 (勒脚) ……4-32、18-5、21-17、47-9、51-3
輿 (轎子) ……3-60、9-7、10-34、19-46、23-20、25-11、
26-49、27-24、40-4、42-54、48-37
輿かき (轎夫) ……3-62、10-36、19-47、23-21、25-13、
26-52、27-25、40-2
こしかけ (杙子) ……38-5
腰掛け (板凳) ……1-15、2-42、5-40、8-32、10-20、
17-39、34-46、41-29、51-20
腰掛けに上がって観劇する ……34-45
腰掛けを運ぶ ……13-9
腰壁 ……17-33、35-21
腰壁 (檻牆) ……11-40、14-8
腰切り (対襟短衣) ……16-5
腰格子戸 (榻扇) ……35-13、38-30
腰を屈める ……38-26
小太鼓 (花鼓) ……34-22
小机 ……6-24
小槌 (小鉄錘) ……17-27
子連れの女性 ……19-15
子供 ……2-18、3-35、15-42、18-33、19-20、21-22、
25-18、30-30、34-35
子供の世話をする ……3-33
子供の手を引く ……2-56、3-58
子供を負ぶう ……20-15
子供を抱く ……39-25
小旗 ……46-14
小船 ……1-4、6-14、50-36
小間物屋 ……10-3
小道 ……4-36

米袋 ……21-40
米を背負って運ぶ ……21-53
米を袋からあける ……21-56
菰 ……8-54
こんろ (炉) ……3-32、5-4、6-19、10-26、26-31、32-3

さ

竿 ……45-16
棹 ……1-21、5-10、8-17、12-21、13-1、16-29、19-58、
21-64、29-34、38-24、45-9
棹で操作する ……9-19
竿秤 ……10-9、25-44、48-31
竿秤で量る ……25-43
棹を操る男 ……3-25
棹を差す ……1-22、2-22、6-13、8-18、19-66、
24-8、25-72、31-58、35-33、41-32
酒甕 ……18-47、37-31
逆さまに伏せた甕 ……15-32
酒壺 ……5-30
魚 ……10-10、25-49
肴 (下酒菜) ……5-36
魚屋 ……10-8
魚を持った女性 ……25-46
先手 ……17-16
先払いの人 ……41-10
先払いをする召使い ……1-31
作業を眺める ……17-36
柵 ……18-12、21-6、50-12
下げ緒 ……10-22、20-25、23-29、24-16、26-67、
28-7、39-13、41-43、51-53
提げる ……7-13
酒を飲む ……43-1
酒を飲む客 ……10-18
酒を運ぶ ……5-31
支え木 ……9-29
支え棒 (架木) ……22-29、36-13
栈敷 ……34-43
刺股 ……13-12
雑貨屋 ……10-28
雑貨屋看板「復興号」 ……22-30
皿 (菜盆) ……5-37
ざる (箕) ……19-34
ざる (簍) ……3-24、21-41
三合院 ……32-58
山門 ……28-2
寺院 ……18-1

- 四角い日傘……………2-35
 四角い盆（托盤）……………27-19
 地金（熟鉄）……………17-23
 敷居（下檻）……………17-34、21-18、29-22
 敷居（門檻）……………18-14、22-25、26-25
 敷石（井台）……………4-30、51-51
 敷石（地磚）……………10-25
 敷き板……………6-5
 直綴（道袍）……………2-33、27-29、30-15
 試験監督……………49-7
 試験を受ける……………49-30
 扱き帯（汗巾）……………2-58、4-6、8-52、10-37、14-27、
 15-35、16-13、19-6、25-48、26-45、32-69、36-7、
 38-35、42-22、51-57
 下鞍……………22-48
 下向きの瓦（合瓦）……………51-38
 枝垂れ柳……………5-49、15-28、16-2、17-2
 質屋（当舗）……………21-1
 質屋の看板（当幌）「当」……………21-21
 漆器専門店……………32-13
 藪下戸……………14-3
 藪戸（支摘窓）……………14-1、26-47
 柴……………26-74
 芝居に足を止める……………34-41
 鴟尾（正吻）……………9-8、29-2、33-54、34-3、35-26、36-19、
 38-12、39-33、44-28、45-35、48-1、49-1、50-1
 地覆（地袱）……………7-42
 地覆石（階沿）……………21-19、22-26、23-19、29-23、49-31
 下肥を田に撒く……………13-35
 しゃがむ……………15-3、16-19、19-21、31-4
 三味線（三弦）……………26-44、38-2
 じゃんけん（猜拳）……………5-35
 銃眼（砲眼）……………36-67、45-47
 重箱……………6-15、39-16
 主人……………10-30、35-5
 数珠（念珠）……………14-54、32-64
 朱塗りの鹽……………6-21
 酒盃……………5-27
 重盆……………39-8
 春聯「春王正月」……………25-81
 春聯「天子万年」……………25-82
 笙……………26-42
 錠（鎖）……………20-26
 上衣（短衫）……………8-28、14-26、26-61、34-38
 乗客……………2-24
 障子（榻扇）……………25-33、38-32
 少年……………14-50
 乗馬……………22-45、23-11、26-72
 商品の服……………25-9
 商品を勧める……………19-32
 招福札（門箋）……………2-61、51-27
 招福札（門箋）「福」……………25-80
 照壁……………50-18
 城壁（城牆）……………24-1、25-1、27-41、45-1、46-2
 馬出し（馬面）……………45-2
 小帽……………4-3、5-32、25-53、26-18、27-33、28-51、31-42
 城門……………45-49、46-3
 城楼……………45-32、46-1
 書架……………51-23
 書画の掛け軸……………39-1
 燭台……………18-21
 食糧運搬船（漕舫）……………1-35
 食糧問屋……………24-6
 女性……………7-11、34-36、45-26
 女性の上着……………2-57
 女性の長着……………26-58、32-68
 女性料理人（船娘）……………32-26
 書籍……………10-2、40-6、51-24
 書を書く……………32-9
 白髪……………5-24、14-52
 尻繫……………3-52、20-14、22-52
 白い髯……………5-26
 白い眉……………5-25
 白壁……………13-14
 薪炭問屋……………24-21
 新婦……………42-5
 新婦の上着（披風）……………42-7
 新郎……………42-1
 新郎の上着（吉服）……………42-2
 新郎の父……………42-12
 新郎の母……………42-10
 簀……………13-41
 水牛……………9-21、13-39
 水産物問屋……………31-36
 水滴……………43-5
 水田……………12-25、13-37、34-34
 水夫……………41-13
 水門……………45-5
 水路……………45-27
 スカート（裙子）……………2-59、7-54、8-29、14-28、
 19-19、26-59、32-70、34-39、38-36、42-23
 犁……………9-25
 頭巾（道冠）……………2-32、27-30、30-14
 厨子……………25-52

頭上運搬……………23-7
 頭上に挙げて運ぶ……………18-45
 鈴……………18-22
 錫器店……………31-22
 勧める……………30-16
 硯……………11-35、26-56、30-27、32-10、43-4、51-19
 裾(下擺)……………8-57
 裾紐で止める……………2-49、17-28、27-15
 簾……………5-47、11-21、14-48、25-84、26-41、34-48、
 35-19、41-40
 簾を開けて窺う……………35-20
 ズボン(褲子)……………3-57、4-7、6-35、8-53、10-33、
 17-19、19-7、21-60、23-32、24-44、26-23、30-12、
 31-15、32-54、36-8、38-20、39-20、42-49、43-25、
 51-58
 角頭巾……………19-45、42-20
 隅棟(戢脊)……………7-6、34-6、36-25、45-37
 素焼きの甕……………19-65、28-35
 素焼きの鉢(陶盆)……………8-8、21-46
 座り込んで話す……………48-35
 座る……………51-21
 税銀運搬用の木製金庫(銀鞘)……………48-13
 正門(南門)……………48-17
 蒸籠……………24-39、37-32、39-28
 背負い籠……………10-4
 背負う……………1-42、19-54、23-10
 せがい……………37-45
 せがいで艫を漕ぐ……………41-17
 接客係……………8-12
 背中に負う……………7-22
 銭差し(銭串)……………25-79
 背もたれ(靠背)……………18-43
 迫石(券石)……………7-44
 膳……………40-9
 膳板(榻板)……………11-39、14-7、17-32、22-12、28-24、
 29-14、36-58
 船客……………6-12
 船上生活者……………44-20
 船上の酒盛り……………5-17
 扇子……………34-19、41-48
 扇子(折扇)……………29-30
 船倉から荷を揚げる……………1-44
 洗濯物……………3-7、8-36、27-49
 前庭……………51-13
 宣伝文句「公平交易」……………24-3
 宣伝文句「本店包辦各色酒席」……………41-54
 宣伝文句「本窯缸饘発客」……………15-12

船頭……………2-21、24-10、29-35、45-8
 「禅堂・方丈」……………44-5
 帆柱(頭桅)……………1-36
 氈帽……………22-31
 添い嫁(養嬢)……………42-13
 僧衣……………28-4
 裝飾板(欄板)……………7-38
 相談する……………22-16
 僧侶……………21-14、28-3、39-10、45-10
 側壁(山花牆)……………7-45、15-5、27-57、37-8、45-23
 袖石……………44-11
 袖なしの上着(半臂)……………2-60、17-26、26-62
 袖なしの長着(半臂)……………7-55、14-25、19-17、36-6
 38-34、42-21
 袖なしの短い上着(馬夾)……………5-21
 袖を引っ張る……………14-33
 袖を巻く……………21-39
 外堀(護城河)……………45-25
 外をうかがう……………19-56
 礎盤(柱礎)……………33-30

た

台(盆架)……………38-8
 対襟の上着……………4-16
 太鼓……………48-5
 太湖石……………40-18
 太鼓橋(単拱石橋)……………7-35、9-11、12-5、44-24、50-33
 退場口(下場門)……………34-15
 「大仏殿」……………44-4
 倒した帆柱……………3-17、9-18、12-23、41-35
 籬……………4-23、7-26
 互い違いに積んだ甕……………15-18
 高く積み上げた壺(饘)……………15-19
 高張り提灯(檠灯)……………42-45
 籬屋(修桶匠)……………7-23
 炊口(炉口)……………17-13
 たくし上げたズボン……………2-23、3-19、4-47、5-33、
 11-10、16-6、21-54、25-73、28-11、35-36
 托鉢をする(化縁)……………28-38
 竹籠……………25-17
 竹細工物……………40-5
 竹竿を運ぶ……………27-40
 竹製品……………32-1
 竹の筏……………6-31
 竹箒……………11-25
 たすきがけ(布帯)……………18-40

- 多層塔……………44-3
 佇む少年……………5-42
 立ち食いをする ……21-47
 立ち話をする ……2-8
 立ち話する官僚たち ……27-20
 手綱 (綱繩) ……3-48、20-10、22-51
 経糸 ……14-18
 経糸を整理する ……14-19
 経糸を巻く ……14-21
 豎框 (辺程) ……14-45
 立膝 ……15-25
 立枠 (抱框) ……17-31、18-15
 棚 (貨架) ……18-51、27-8、37-24
 煙草問屋看板「煙行」……………24-14
 煙草屋 ……10-12
 煙草を吸う ……30-20、31-25、43-22
 束ねた薪……………2-28
 旅人 ……2-12
 舵柄 ……3-36、5-2、6-16、19-62、34-64
 たも綱……………9-31
 盥 ……21-63
 垂らした辮髪……………5-22
 垂木 (椽) ……10-48、11-12、14-37、18-4、20-2、22-8、
 23-15、24-20、25-7、26-4、28-21、29-8、30-4、33-
 11、35-24、36-63、42-34、47-26、49-27
 短冊板 (桶壁) ……4-22
 箆笥 (櫃子)……………18-36
 竹器店看板「竹器」……………44-18
 帙入り書物 ……11-37
 茶館 ……31-17
 茶卓 ……6-27
 茶店看板「茶室」……………44-15
 ちゃぶ台 (几) ……8-33、19-60
 茶店 (茶棚) ……2-34
 茶店の主人……………2-36
 茶碗 (茶杯) ……2-40
 茶を飲む……………8-41
 主柱 (中桅) ……1-37
 厨房 ……1-13
 長衣 (襖衣) ……42-8
 提灯 ……1-10、27-45、32-5、37-37、42-28
 提灯 (宮灯)……………37-19
 提灯 (紗灯)……………37-20
 長刀 ……47-23
 庁堂 ……42-31
 長命鎖 ……34-55
 ちろり (錫酒壺)……………33-14、43-7
 築地塀 (圍牆) ……14-40、18-2、30-31、35-17
 築地塀 (圍牆 [滴水]) ……10-50、33-56
 対聯 ……21-4、22-11、23-5、31-38、32-11、33-24、
 37-14、40-8、42-35、47-8、48-4、50-32、51-26
 対聯「居之安」……………26-9
 対聯「臣心似水」……………48-21
 対聯「水面忽添新鎖鑰」……………19-52
 対聯「帝徳如天」……………48-20
 対聯「波心仍照旧輿梁」……………19-53
 対聯「平為福」……………26-10
 通路 (戦台通道)……………45-45
 杖 ……7-30、14-53、15-41、18-32、20-28、22-54、
 28-31、29-36、34-57、38-37
 杖をつく……………19-28、32-40
 杖をつく老人……………32-63
 束石……………42-42
 束石 (角柱石) ……18-25、33-43
 束柱……………34-25
 突上げ窓 (支窓) ……3-15、8-5、13-15、14-31、32-25、
 41-34、51-42
 突出し日除け……………1-9
 継艦……………37-46
 机 ……6-29、11-36、17-38、34-31、36-30、49-8、51-32
 机のカバー……………33-23、49-9
 槌……………1-47、3-22
 土を運ぶ……………16-4
 包……………45-15
 綱……………2-2、6-9
 綱 (索)……………36-12
 綱渡り (走索) の芸人……………36-4
 妻 (山墻)……………7-10
 妻壁……………33-6
 釣り縄 (井縄)……………4-25
 吊し看板……………22-67、23-33、25-36
 釣瓶 (吊桶)……………4-24、14-29
 低音喇叭 (銅角)……………41-22
 停泊中の船……………15-29、16-24
 食糧運搬船 (漕舫)……………2-1
 手提げ籠 (籃子)……………31-55、34-67、39-17
 手すり (尋杖)……………7-37、37-27
 手すりに掴る……………27-50
 鉄錨……………1-11
 手甲袖 (馬蹄袖) ……2-46、7-21、19-13、22-77、25-25、
 27-23、28-49、29-28、30-8、31-30、32-48、40-11、
 42-53、48-40
 手甲袖 (馬蹄袖) で手を隠す……………8-22、21-35、
 33-50、34-51

鉄鍋 ……5-5
鉄輪（鉄環）……17-10
手に持つ……51-9
出迎える役人 ……24-25
手を袖に入れる（籠手） ……8-40
手をつく ……15-24、43-15
手を握って話す ……41-53
手を握る ……31-44
手を隠して歩く ……28-17
手を引く ……10-38、19-18
手を振る ……2-27
店員 ……36-52
纏足（小脚）……36-10
でんでん太鼓（拔浪鼓） ……3-34、10-5、14-32
「天王殿」……44-8
天板（柜頂）……18-39
天日干し中の素地 ……16-23
天日干しの薬材……31-9
天秤棒（扁担）……4-18、10-21、13-34、20-24、23-28、
24-15、26-66、28-6、39-12、41-42、50-16、51-52
天秤棒で担ぐ ……3-41、8-50、15-33、23-41、45-14
天秤棒で荷を担ぐ ……27-16
天秤棒で運ぶ……18-46、19-44、28-5、48-28、50-15
天秤棒で水を運ぶ ……4-2、27-13
天秤棒を支える ……4-8
店舗 ……7-47
ドア（柜門）……18-37
答案用紙（試卷）……49-32
道具の包み（包袱） ……7-24
道士 ……2-31、27-28
陶磁器問屋 ……31-51
道士の弟子（道童）……27-31
登場口（上場門） ……34-14
燈籠 ……22-55、27-3
燈籠の柱（懸柱） ……27-4
通し柱 ……22-23、23-18、25-34、26-8、28-22、29-12、
36-59、47-29
床屋（剃頭匠） ……7-34
扉 ……24-4、26-11、32-12、48-19
土瓶（水壺）……3-23、4-46、5-9、6-7、15-13、21-45、
24-48、32-2、41-31
苫（船篷）……1-58、3-26、5-11、6-17、8-46、9-13、
13-45、15-30、16-30、19-59、21-61、24-12、25-55、
30-28、31-20、35-30、39-34、40-17、44-19
留め杭（木柱） ……4-11
止め縄……4-43
艦（船）……1-51、2-6、8-30、9-14、44-23、50-38

艦綱 ……1-48、3-13、12-22、25-77、38-28
艦の繫船柱（後將軍柱） ……1-50
艦屋形（船艙） ……3-14、8-1、32-24、37-53、41-33
艦屋形にいる女性 ……3-16、8-6
艦屋形の窓 ……31-57
艦屋根（舵楼） ……1-49
艦屋根（船棚） ……1-12、8-26
銅鑼（金鑼）……41-12、1-33
鳥籠 ……22-1、38-9、39-39
鳥籠（鶏籠） ……8-48
取り外し葺戸（摘窓） ……14-3
井 ……5-8、21-49

な

苗木 ……32-8、40-13
苗を担ぐ……37-3
長椅子（榻） ……38-4
長柄（轡桿） ……3-61、10-35、25-12、26-51
轡 ……40-3、41-9、42-55
長柄傘 ……2-16、10-7、12-7
轡を肩にかけて運ぶ……40-1
長着（袍子）……2-45、6-39、7-20、8-23、10-43、11-28、
19-5、21-36、22-78、23-25、25-26、28-50、29-29、
30-9、31-31、32-49、33-51、34-52、36-17、38-39、
39-38、41-5、42-56、43-11、48-41、51-12
長履（靴子）……39-14、41-6
長腰掛け（長板凳）……34-32
長腰掛けを担いでくる ……34-62
長机 ……2-38、18-19、30-26、35-10、51-17
中庭（院子） ……21-50、32-59
中庭（天井） ……25-2
眺める ……7-32、19-25
長持 ……20-23、25-15
長押（額枋）……10-49、14-38、25-8、26-5、29-16、
36-54、49-28
長押（椽枋）……20-3、29-9、33-12、36-64
長押（塾枋） ……21-10、28-26
仲人（媒人）……42-14
鍋 ……6-20、24-37、26-30
鍋蓋 ……5-6、26-29
南門〔南の脇門〕 ……36-3
荷 ……13-27、24-17、50-17
荷（貨物） ……25-57、50-39
二階から見下ろす ……20-20
二階建て店舗 ……22-3、23-2、25-32、28-18、29-1、36-49、
45-28、47-24

二階の鱧屋根1-53
 二階の料理屋37-17
 肉問屋31-46
 「二山門」(断梁殿)44-10
 担い棒7-53、13-10
 担い棒で担ぐ47-36、48-23
 担い棒で運ぶ1-43、3-3、13-28
 二本棒で担ぐ18-35
 鏡鉢41-19
 庭15-11
 庭(後院)4-12
 鶏8-49、39-40
 庭を掃く11-24
 荷を抱える27-36
 荷を担いで石段を降りる32-42
 荷を担ごうとする26-65
 荷を組む3-21
 荷を背負う26-40
 貫4-40、11-14
 布靴(布鞋)3-63、6-40、7-29、8-24、10-44、11-30、
 17-20、19-14、21-26、22-35、23-27、24-47、25-27、
 26-24、29-32、30-10、31-16、32-51、43-14、48-42
 布履38-23、39-22、41-46、42-50、42-57
 布製の長靴8-25、23-26、32-50、33-52、
 34-53、36-18、48-44、49-14
 寝る1-24
 粘土(稠泥)16-16
 農夫姿の男性4-13
 軒(下檐)21-8、34-11
 軒(上檐)34-9、
 軒(歇山)36-25
 軒瓦(滴水)22-6、26-2、29-6、30-2、33-9、
 47-25、49-25
 鋸11-15
 鋸を引く11-16
 野地板11-9
 幟(幡)1-29、3-5、12-17、41-15
 幟(幌子)27-39
 幟「測字」30-23
 幟棹9-1、12-16
 野良道9-22、12-27、13-48
 糊14-15
 糊を経糸につける(漿紗)14-16
 暖簾(帘)24-13

は

牌楼12-10、13-5、19-50、20-7、46-18
 牌楼「天開文運」50-4
 量る22-15
 刷毛(鱧刷)14-17
 箱20-27
 狭間胸壁(女牆)36-66、45-46
 橋2-62、27-52、34-68
 箸5-38、21-48、26-27
 橋杭(橋柱)4-38、15-4、27-56、37-7、45-22
 梯子11-4、12-15、31-10、34-28
 梯子をのぼる11-5、31-11
 橋の下(金門)7-46、37-9、45-24
 橋の守護獣(吸水獸頭)19-23、20-32
 橋の名前「山塘橋」31-39
 橋の名前「半塘橋」32-36
 馬術訓練46-16
 芭蕉扇22-41、27-51、41-50、42-24、49-10
 柱11-11、38-14、45-41、48-22、49-29、51-8
 橋をくぐる船19-63
 旗13-16、46-11
 叩き(擲子)47-30
 畑13-38
 旗竿13-17、46-12、47-3
 旗棹44-22
 旗竿石46-13
 裸足2-11、4-48、5-34、6-41、24-11
 鉢15-14
 鉢(花盆)14-56
 鉢(菜碗)33-21
 桴(槌)1-32、21-15、34-21、41-11
 鉢植え32-21
 鉢巻35-34
 鉢巻(遮眉勒)8-38
 鉢巻(包頭)14-20、38-38
 鉢盂28-40
 八角の瓦屋根40-21
 八角形の窓(八方式窓)34-12
 花売り20-30、25-30
 花籠(花籃)32-66
 話し合う女性たち27-26
 話し合う人々45-17
 話しかける30-18、31-26、43-20
 破風(博風)7-5、28-43、33-5、41-59
 ハム(火腿)6-26、37-23
 羽目板(檻牆)7-8、20-6、22-13、23-4、25-35、

26-7、27-6、28-25、29-15、36-35、37-22、45-40、
47-28
針仕事をする女性……………8-42
番犬……………32-61
「萬歳楼」……………44-6
飯台（木盆）……………10-11
番頭（店主）……………41-51、48-34
「半塘橋」……………32-35
日覆い……………34-29
火加減を見る……………32-33
日傘（陽傘）……………25-14、26-57、27-1、42-25
引出のある箱……………27-17
曳き綱……………9-16、12-19
曳き船……………1-1
髭……………8-44、27-21
庇……………38-13
庇（檐篷）……………11-31、18-56、22-17
跪いて荷を持ちあげる……………3-18
跪く……………51-29
肘掛（扶手）……………18-44
肘掛椅子（靠背椅）……………18-42、35-9
肘枕……………6-18
柄杓……………13-36
櫃……………39-15
羊……………12-3
羊飼ひ……………12-4
火箸……………32-34
緋毛氈……………35-2、42-4
標示牌（官銜牌）「欽命」……………24-33
標示牌（官銜牌）「部堂」……………24-34
標示牌「回避」……………47-34
標示牌「江蘇布政使司」……………47-32
標示牌「肅靜」……………47-33
標示札（告示牌）……………49-23
屏風……………33-16
日除け（幔）……………2-4、5-12、7-48、9-6、11-32、13-31、
18-48、22-20、27-7、31-35、32-28、35-14、36-26、
39-26、40-19、41-57、50-42
開かれた本……………51-28
平瓦（青瓦）……………33-8、51-36
琵琶艦……………1-56、3-39、8-13、19-67、21-65、
32-6、50-37
琵琶を爪弾く……………35-4
火を扇ぐ……………3-29
封印された銀塊……………47-37、48-24
吹流し（幌子）……………2-54、22-19、25-21、31-32、48-36
吹抜門……………51-4

服……………15-31
服飾店……………25-4
副舵（披水板）……………25-75
袋……………24-35
服を広げて見せる……………25-10
ふさ（流蘇）……………33-36
蓋……………14-12、37-33
札「解餉」……………47-40
札「投文」……………47-39
札「放告」……………47-38
豚……………14-11
舞台衣装の長い袖（水袖）……………33-31
舞台に敷く緋毛氈（氈氈）……………33-29、34-24
舞台の床（台板）……………34-17
豚に餌を与える……………14-9
豚の仲買……………24-31
二人で担ぐ……………7-52、45-13
ふちどりのある旗……………47-35
筆を持つ……………43-6
船縁（舷）……………1-28、3-37、5-14、8-16、24-30、32-32、
41-41、50-40
船縁に掛けた棹……………3-40、19-64
船……………13-4、17-1、24-9、31-21、45-7
船に上げられた艦……………5-3
船の人に声をかける……………19-30
船の屋形に上がって観劇する……………34-60
舟を曳く……………9-15、12-18
船を曳く……………1-2
踏板（踏歩）……………37-29
踏み台……………11-17
不明物体……………12-11、13-6
プリーツスカート（褶裙）……………27-27
振り向く……………5-39、7-51、19-38、27-38、37-10
風呂敷（包袱）……………2-14、7-33、10-42、25-28、
26-20、34-42、50-25
風呂敷を抱える……………21-24
風呂敷を肩に掛ける……………3-55、7-31、19-31、21-20、
22-32、48-30
風呂屋（浴室）……………22-71
文鎖（鎖尺）……………51-33
塀（囲牆）……………7-1、15-10、32-62、33-2、37-1、51-1
平衡棒（平衡桿）……………36-11
兵士……………46-15
塀の上縁（塀頂）……………51-2
べール（蓋頭）……………42-6
舳先（船）……………1-38、8-19、41-25、50-41
舳先の装飾……………1-34

弁当箱（食盒）……………22-39
 辮髪 ……………7-15、16-11、20-36、22-60、25-16、30-29、
 33-40、35-12、36-15、38-17、39-4、42-46、49-12
 帆 ……………9-12、13-42
 方形造（四角攢尖頂）……………19-41
 帽子（暖帽）……………2-43、3-49、5-29、6-37、7-18、
 8-20、10-40、11-26、15-15、17-37、19-10、20-35、
 21-33、22-74、23-23、24-42、25-23、26-28、27-46、
 28-47、29-26、30-5、31-12、32-45、33-18、34-49、
 35-11、36-14、38-6、39-3、41-2、42-51、43-10、48-
 38、51-10
 帽子なし ……………15-34
 宝珠（宝頂） ……………19-42、40-22
 方立柱（抱框） ……………14-41、51-25
 包丁（菜刀）……………26-33
 棒に提げた荷物 ……………31-43
 傍吻（脊獸）……………28-1、45-38
 ポーチ（抱廈）……………33-34
 補強杭……………4-42
 干されている大綱……………5-48
 補子のある上着（鱗衣）……………33-20
 釦 ……8-45、19-12、22-76、26-22、30-7、32-47、33-49
 掘立柱 ……………10-17、17-7
 帆綱（帆索） ……………1-6、37-41
 火炉（竪炉）……………17-12
 帆柱（桅）……………1-5、12-1、35-28、37-40、39-35
 柱に掲げる旗（順風旗） ……………36-44、37-39
 帆柱を下ろす ……………25-66
 微笑む ……………20-29
 盆（托盤） ……2-41、7-58、8-55、19-49、22-42、31-33、
 33-46、36-53
 盆栽（盆景） ……………14-55、40-12
 盆栽屋 ……………32-20
 本柱（金柱）……………33-25

ま

巻いた掛け軸……………39-6
 前掛け ……………40-14
 前包み（下檐博脊） ……………34-10
 前包み（上檐博脊）……………34-8
 前包み（博脊）……………33-7、36-24
 薪 ……………24-23、26-34
 巻き上げた袖 ……………4-4
 巻き上げた辮髪 ……………3-54、19-35
 巻き簾 ……………37-36
 薪を割る ……………26-35

幕（幔）……………1-54
 楣 ……………4-9、14-4、30-13、31-53、51-47
 枕 ……………1-25
 まげ（髻）……………7-12、8-37、14-22、19-16、
 25-47、26-60、32-67、34-37、36-5
 枡（斛）……………21-42
 枡形（瓮城）……………45-44
 枡の取っ手 ……………21-43
 窓 ……………19-57、21-3
 窓（檻窓）……………25-50、28-23、41-39、47-27
 招き ……………13-23
 招き（酒旗）……………10-15
 繭を貯蔵する甕（繭甕）……………14-13
 魔除けの壁（影壁）……………47-15
 丸太 ……………11-18
 丸窓 ……………7-9、25-20、27-48、45-31
 「万年橋」……………19-1
 見下ろす ……………20-33
 短い上着（馬褂） ……………2-13、7-16
 水桶 ……2-10、4-20、10-27、11-8、15-2、16-9、26-69、
 27-12、33-28、51-54
 水甕 ……………2-39
 水際階段（水埠）……………25-45
 水を汲む ……………2-9
 水を運ぶ……………16-8
 耳石（垂帯石）……………18-30、28-14、33-45、42-40、46-8、
 48-15、49-22
 耳飾り……………8-39
 民家 ……………46-17
 むぎわら帽（笠兒）……………41-28
 筵 ……………6-11
 蓆屋根（草頂）……………34-4
 鞭 ……………9-24、22-47、22-67
 胸繫（鞅）……………20-11
 棟飾り（宝塔）……………34-2
 むぎわら帽（笠兒）……………38-25、39-11
 棟（簷頭脊）……………33-4
 召使（書童）……………50-26
 召使（小厮）……………33-15、43-9
 召使の女性 ……………18-58
 棉布問屋 ……………31-40
 毛氈 ……………43-2
 木魚 ……………21-16
 木柵 ……………13-8
 木柵門 ……………18-52
 木造階段（樓梯）……………37-25
 木台 ……………17-25

木棒 ……………2-15
 凭れ掛かる ……………8-7、20-37、23-3、27-47、34-66、
 36-29、37-16、51-22
 窓から下を見る ……………47-31
 物売りの舟 ……………6-22、24-36
 物干し竿……………15-6
 物見櫓 ……………9-2、12-13
 物を渡す ……………34-27
 桃の花 ……………15-37、43-17
 もやい杭 ……………3-6、16-25
 もやい綱（船纜）……………1-40、16-26
 もやい柱……………1-39、9-17、16-27
 もやい船 ……………12-24
 諸肌脱ぎ ……………17-18、26-37
 門 ……………10-51、13-7、18-13、32-60、33-53
 門神 ……………4-34、24-5、48-18
 門番 ……………50-9
 門扉 ……………50-7

や

屋形（貨艙）……………25-56
 屋形（後艙） ……………1-17、37-52
 屋形（船艙）……………5-46、19-55
 屋形（中艙）……………1-20、3-11、8-3、24-28、25-71、
 37-51、41-38
 屋形（頭艙） ……1-26、3-9、8-4、24-27、25-70、32-30、
 37-50、38-29、41-14
 屋形の二階（楼艙） ……………1-23
 屋形の両側にある通路（廡堂）……………1-27、25-74
 屋形船（画舫） ……………32-27、37-35
 薬缶 ……………3-31
 役者（丑）……………34-18
 役者〔若い女性役〕（旦）……………33-32
 役者〔脇役〕（雑）……………33-27、34-20
 役所の旗「江蘇総藩」……………47-2
 役所の東門……………47-7
 屋根（屋頂）……………2-3
 槍 ……………13-11、47-21
 遊覧船 ……………1-7
 指差して話す ……………50-21
 指差す ……………2-52、7-17、15-43、18-34、19-29、21-23、
 22-37、23-35、27-18、30-22、34-40、36-40、37-12
 指を指す女性 ……………32-65
 浴場 ……………22-72
 横竿 ……………46-10
 横笛 ……………5-15、42-17

横笛を吹く ……………5-16、33-39、35-3
 横見をする ……………7-14
 よそ見をする ……………5-19
 四つ手網（罾）……………9-28
 四人で艙をこぐ ……………37-44
 嫁入り道具（粧奩）……………42-29
 呼び掛ける客……………2-26
 嫁迎いの輿（花轎）……………41-7、42-26
 嫁迎いの同行人……………41-1

ら

喇叭 ……………41-21、42-30、47-13
 欄干 ……………2-63、7-36、11-23、12-6、24-29、29-38、
 33-17、34-13、35-16、38-15、41-36、42-36、44-25、
 48-14、51-16
 乱積み（乱石岸）……………15-38、18-27、42-43
 欄間（横披）……………11-20、14-39、17-43
 竜頭杖 ……………47-22
 両替店（錢莊）……………32-55
 旅館 ……………24-18、47-5
 梁石 ……………27-55、45-21
 両手で持つ ……………7-57、45-12
 両手を交差させて袖に入れる（箆手） ……27-11、45-11
 梁木 ……………4-39
 料理屋の客 ……………26-38
 料理を運ぶ ……………41-52
 料理を運ぶ女性 ……………5-45
 礼をする（万福）……………42-9
 レリーフ（浮雕）……………7-39
 煉瓦（青磚）……………36-1、45-3
 煉瓦造り（造磚）……………16-3
 煉瓦の素地（磚坯）……………16-20
 連子窓 ……………45-39
 練兵場（教場）……………46-4
 艙 ……………35-32、40-16
 老人 ……5-23、8-43、15-40、18-31、19-27、22-53、29-37
 蠟燭屋……………31-1
 艙腕（艙柄）……………37-47
 老婦 ……………14-51、34-56
 楼門（巷門）……………7-2
 楼門をくぐる ……………2-17
 露台 ……………35-15
 露天の道具屋 ……………19-39
 露天の服屋……………19-2
 露天の焼き物屋 ……………19-26
 露店を開こうとする男 ……………34-61

艀縄（艀索）……………1-57、2-51、19-69、21-66
 艀羽（艀板）……………37-48
 驢馬……………3-46、20-8
 艀を漕ぐ…1-55、2-50、8-14、13-3、19-68、31-59、32-7、
 38-21、44-26
 艀を漕ぐ女性……………3-28、6-25、8-31

わ

脇に抱える……………7-50
 渡し舟……………2-20
 藁靴（草鞋）……………16-7、19-8、34-58
 藁にお……………13-21

●編纂

金 貞我
佐々木 睦
鈴木 陽一
福田 アジオ

●編纂補佐

王 京 神奈川大学COE研究員 (PD)
彭 偉 文 神奈川大学COE研究員 (RA)

●研究参画

菊池 勇夫 共同研究員、宮城学院女子大学学芸学部教授
君 康道 共同研究員、東京大学大学院総合文化研究科講師
金 貞我 神奈川大学COE教員 (非常勤講師)
巖 明 調査研究協力者、独協大学国際教養学部特任教授
佐々木 睦 共同研究員、首都大学東京オープンユニバーシティ准教授
鈴木 陽一 事業推進担当者、神奈川大学大学院外国語学研究科教授
田島 佳也 事業推進担当者、神奈川大学日本常民文化研究所教授
中村 ひろ子 神奈川大学COE教員 (特任教授)
西 和夫 事業推進担当者、神奈川大学日本常民文化研究所教授
福田 アジオ 事業推進担当者、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科教授
ジョン・ボチャラリ 事業推進担当者、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科非常勤
講師・東京大学大学院総合文化研究科教授
前田 禎彦 事業推進担当者、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科准教授

ISBN 978-4-904124-00-0

神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書
『東アジア生活絵引』中国江南編

発行日

2008年2月20日

編集

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

発行

神奈川大学21世紀COEプログラム

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 TEL 045-481-5661 FAX 045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>

制作 有限会社あむ 印刷 株式会社●○●○

Printed in Japan

©神奈川大学21世紀COEプログラム2008 非売品

著作権者の文書による許諾がないかぎり、法律が認める場合を除き、本書の全部もしくは一部を複製すること、あるいは送信公開することを禁じます。

神奈川大学21世紀COEプログラム 人類文化研究のための非文字資料の体系化

2002年度から文部科学省が開始した「21世紀COEプログラム」は、世界的な研究拠点を構築するための大学支援策であり、大学院博士課程を持つ大学がその対象に採択されることを目指して競うこととなった。私どもの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は、2003年度に学際・複合・新領域の分野で採択された。この計画は、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科と日本常民文化研究所、それに大学院外国語学研究科中国言語文化専攻が加わり、学際的に研究事業を展開する構想であった。実施に当たっては、事業推進担当者に加えて、COE教員及びCOE共同研究員を制度化し、研究課題にかかわる学内外の多くの研究者に参加を要請し、共に研究に従事してもらい、目的を達成することにした。

今までの文化研究では文字に記録された事象に専ら関心が集中してきた。しかし、文字に表現されない人間の観念・知識・行為ははるかに幅広く、質量ともに大きい。それは文字で表現された事象とは比較にならない。私たちの事業は、これらのなかから①図像、②身体技法、③環境・景観の三つに絞って、それぞれの事象について資料化する方法を開発し、その結果として資料を蓄積し、蓄積した資料を分析して発信することを目的としたものである。それぞれに幾つかの具体的課題を設定した。その組織は以下の通りである。

第1班 図像資料の体系化と情報発信

課題1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂刊行

課題2 日本近世・近代生活絵引の編纂

課題3 東アジア生活絵引の編纂

第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

課題1 身体技法の比較研究

課題2 用具と人間の動作の関係の分析

第3班 環境と景観の資料化と体系化

課題1 景観の時系列的研究

課題2 環境認識とその変遷の研究

課題3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

そして、これら三つの非文字資料を統合し、世界に向かって発信する方法を開発することを課題に、以下の三つの研究班を編成した。

第4班 地域統合情報発信

第5班 実験展示

第6班 理論総括研究

研究事業参画者は班・課題に属し、目的達成に向かって共同研究を展開した。その研究成果は、すでに各種の刊行物やホームページで順次公開してきたが、その最終成果をデータベースや各種情報のウェブ上での発信や展示という方法で世に問い、また多くの研究成果報告書として刊行することとした。本書はその研究成果報告書の1冊である。

なお、本プログラムのもうひとつの目的として、世界的に活躍することができる若手研究者の育成がある。COE研究員（PD・RA）制度を設け、優れた若手研究者を採用し、研究活動に従事してもらうようにした。海外での調査研究を行なうための派遣や、研究成果を発表する機会を設けた。若手研究者の育成は、研究員を支援するだけでなく、拠点となる歴史民俗資料学研究科や中国言語文化専攻の研究教育条件を整え、カリキュラムを充実させ、前期課程（修士）から足腰の強い学生を養成することも構想し、具体化した。

5年間の研究を経て、私たちの拠点が世界の研究者とのネットワークを形成し、様々な形態の非文字資料を集積し、それを世界の人類文化研究に提供する非文字資料研究センターとしての役割を果たすことを構想している。本プログラムへの批判や提言を積極的にお寄せいただければ幸いである。